天理市文化財調査年報

平成19年度

史跡 赤土山古墳（第９次）
成願寺遺跡（第15次）

2009

天理市教育委員会

例　　言

1，本書は天理市教育委員会が平成19年度に実施した文化財に関する事業の概要をまとめたものである。

2，本市教育委員会はこれまで市内遺跡の発掘調査概要報告書を、個人住宅建設に伴う調査等とそれ以外の調査の２シリーズに分けて下記のとおり刊行してきた。

個人住宅建設に伴う調査等		それ以外の調査	
天理市埋蔵文化財調査概報　森本・薩之庄遺跡（高岸地区）	平成２年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　昭和58・59年度	昭和60年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　乙木・檜垣遺跡	平成２年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　昭和60年度	昭和61年３月
天理市埋蔵文化財調査概要報告　1990年度	平成３年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　昭和61・62年度	平成元年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　1991年度国庫補助	平成４年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　昭和63・平成元年度	平成４年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成４年度・国庫補助調査	平成５年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成２・３年度	平成５年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成５年度・国庫補助調査	平成６年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成４・５年度	平成８年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成６年度・国庫補助事業	平成７年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成６・７年度	平成10年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成７年度・国庫補助事業	平成８年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成８・９年度	平成15年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成８年度・国庫補助調査	平成９年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成10・11・12年度	平成17年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成９年度・国庫補助事業	平成10年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成13・14年度	平成19年12月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成10年度・国庫補助調査	平成11年３月	天理市埋蔵文化財調査概報　平成15・16年度	平成21年３月
天理市埋蔵文化財調査概報　平成11年度・国庫補助事業	平成12年３月	後続刊は作成中。	
天理市埋蔵文化財調査概報　平成12年度・国庫補助事業	平成13年３月		
天理市埋蔵文化財調査概報　平成13年度・国庫補助事業	平成14年３月		
天理市埋蔵文化財調査概報　平成14・16年度・国庫補助事業	平成17年３月		
天理市埋蔵文化財調査概報　平成16年度・国庫補助調査	平成18年３月		
巡平成17年度は対象事業なし。			
天理市文化財調査年報　平成18年度	平成20年３月		
天理市文化財調査年報　平成19年度	**本書**		

平成18年度以降の個人住宅建設に伴う調査等（縄囲確認調査等を含む）については、上記左のシリーズに後続する『天理市文化財調査年報』（本書）に収録する。それ以外の調査については、上記右のシリーズに後続する『天理市埋蔵文化財調査概報』として従来どおり刊行を続けている。このほか、単冊の調査概報や調査報告（第８集まで刊行済）も必要に応じて刊行する予定である。

3，現地調査から遺物整理作業及び本書作成に至るまで下記の方々のご助力を得た。記して謝意を表する。

小野間智子（奈良教育大学）、後藤愛弓（奈良女子大学）、中尾祥悟・中西宏昌（天理大学）

松本吉弘（京都大学）、岩井真生、河喜多淑子、松本真並　　［所属は当時のもの］

4，現地調査、出土遺物及び類例等について、下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して謝意を表する。

史跡赤土山古墳整備委員会、高橋克壽、若杉智宏

5，本書は天理市教育委員会文化財課 主事 石田大輔が編集した。調査概要はそれぞれ調査担当者が執筆した。

目　　次

例　言
目　次

第１章　平成19年度 事業の概要 ―――――――――――――――――――――― 1

第２章　平成19年度 史跡整備事業に伴う調査・範囲確認調査の概要 ――― 7
史跡 赤土山古墳（第９次） ―――――――――――――――――― 石田大輔 9
成願寺遺跡（第15次） ―――――――――――――――――――― 北口聡人 35

第３章　資料報告 ―――――――――――――――――――――――――――― 45
天理市萱生町地内出土の須恵器台付長頸壺 ――――――――― 北口聡人 47

図　版
抄　録

第 1 章

平成19年度 事業の概要

Ⅰ．埋蔵文化財の調査

1．埋蔵文化財発掘届・通知

平成19年度に本市教育委員会を経由した、文化財保護法第93条にもとづく埋蔵文化財発掘届および同法第94条にもとづく埋蔵文化財発掘通知の件数は以下のとおりである。

第１表　平成19年度 埋蔵文化財発掘届および発掘通知件数

	埋蔵文化財発掘届（法第93条）	埋蔵文化財発掘通知（法第94条）		発掘調査	工事立会	慎重工事
平成19年度（2007年度）	118	23	県教委通知	18	83	40

※県教委通知件数には次年度以降に対応するものや県教育委員会が対応するものを含むため、
下記の調査件数等とは一致しない。

2．発掘調査

平成19年度は９件の発掘調査をおこなった。本書では**４史跡 赤土山古墳第９次、８成願寺遺跡第15次**について概要報告をおこなう。それ以外の調査については、別途概報を刊行する予定である。

第２表　平成19年度 発掘調査一覧

	名　称	住　所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概　要
1	前桜遺跡 第６次	富堂町216-1	住宅(賃貸)	180㎡	平成19. 4. 5 ～ 5. 2	石田	中世：溝、土坑など 弥生時代後期：河川
2	中ツ道遺跡	富堂町145-1, 146-1	住宅(分譲)	160㎡	平成19. 5. 8 ～ 5.24	北口	中世：素掘溝 時期不明：溝
3	別所ツルベ遺跡 第４次	別所町203-1, 204-1, 205-1, 206-1	道路	140㎡	平成19. 12. 3 ～12. 21	青木	中～近世：素掘溝 古墳時代前期：遺物包含層（埴輪）
4	**史跡 赤土山古墳 第９次**	**柳本町2920-1他**	**史跡整備**	**21㎡**	**平成19. 12. 19 ～20. 1. 18**	**石田**	**後円部裾ヶ出し 古墳時代前期：円筒埴輪列**
5	渋谷向山古墳陪塚地	渋谷町地内	災害復旧 904-509工区	51㎡	平成20. 2. 25 ～ 2. 28	青木 石田	近世：水路護岸など
6	渋谷向山古墳陪塚地	渋谷町地内	災害復旧 904-510工区	46㎡	平成20. 2. 25	青木 石田	近世：水路護岸など
7	向山遺跡 第２次	柳本町地内	災害復旧 904-508工区	21㎡	平成20. 2. 27 ～ 2. 28	青木 石田	近世：水路護岸など 古墳時代前期：遺物包含層
8	**成願寺遺跡 第15次**	**長岡町101-1, 101-2, 101-3**	**範囲確認**	**107㎡**	**平成20. 3. 3 ～ 3. 24**	**北口**	**古墳時代：河川**
9	成願寺遺跡 第16次	成願寺町地内	災害復旧 904-506工区	57㎡	平成20. 3. 10 ～ 3. 12	青木 石田	近世：水路護岸など

3．試掘調査

平成19年度は６件の試掘調査をおこなった。概要は以下のとおりである。

第３表　平成19年度 試掘調査一覧

	名　称	住　所	調査原因	調査面積	調査期間	担当	概　要
a	シギ山遺跡	柳本町2708-6, 2708-8	住宅(自己用)	9㎡	平成19. 6. 13	北口	遺構なし
b	石上寺跡	小田中町223	その他建物	20㎡	平成19. 9. 27	石田	遺構なし
c	小路遺跡	小路町56	住宅(分譲)	10㎡	平成19. 10. 1	青木 北口	遺構なし
d	中町西遺跡	中町215-3他	工場	45㎡	平成20. 1. 31	北口	古墳時代：遺物包含層
e	中ツ道遺跡	富堂町144-1他	住宅(分譲)	2㎡	平成20. 2. 22	北口	遺構なし
f	条里遺跡	新泉町396-1他	工場	16㎡	平成20. 3. 26	石田	遺構なし

Ⅱ．史跡整備

史跡赤土山古墳整備事業を実施している。平成19年度は、赤土山古墳南側の急斜面保全工事および整備工事を進めたほか、平成20・21年度分の整備工事実施設計をおこなった。また、史跡整備事業の進捗に伴い、遺構の状況を確認するための発掘調査を実施した（第９次調査；本書第２章参照）。

Ⅲ．普及・啓発

１．埋蔵文化財特別展示

文化財課がおこなっている発掘調査の成果を広く市民に紹介するために、「発掘の現場から－地下に眠る天理の昔々－」と題する埋蔵文化財特別展示を平成18年度より実施している。夏季・冬季の年２回開催で、夏季は時代や分野を特集した企画展、冬季は前年度の調査成果速報展をテーマとする。平成19年度は第３回、第４回を開催した。

平成19年度夏の文化財展（第３回）『鍬形石とその時代－古墳時代前期の天理市域－』

平等坊・岩室遺跡第29次調査（平成18年度）で出土した鍬形石や赤土山古墳出土の石製品などを中心に、古墳時代前期後半の遺物を特集した。天理市が全国的に見て有数の腕輪形石製品出土地であることに着目し、市内出土の腕輪形石製品の紹介もおこなった。

『鍬形石とその時代』

展示内容　平等坊・岩室遺跡（第29次）、史跡 赤土山古墳（第３次）、柳本立花遺跡（第１次）、田町遺跡、向山遺跡（第１次）

期　　間　平成19年８月10日（金）～８月31日（金）

会　　場　天理市文化センター１階展示ホール

平成19年度冬の文化財展（第４回）『平成18年度発掘調査速報展』

平成18年度中に天理市教育委員会が実施した発掘調査８件の成果を速報展示した。

『平成18年度発掘調査速報展』

展示内容　平等坊・岩室遺跡（第28・29・30次）、願興寺跡、柳本藩邸遺跡（第11次）、合場遺跡（第６次）、成願寺遺跡（第14次）・ホックリ塚古墳、平等坊・岩室北遺跡

期　　間　平成19年12月11日（火）～12月23日（日）

会　　場　天理市文化センター１階展示ホール

２．市役所ロビー展示

市民の目に触れる機会の多い市役所１階ロビーを利用して小展示をおこなった。

市役所１階ロビー展示

展示内容　史跡 赤土山古墳　円筒埴輪列出土状態レプリカ

期　　間　平成19年８月１日（水）～８月31日（金）

会　　場　天理市役所１階ロビー

3．その他の普及・啓発活動

平成19年度中におこなったその他の普及・啓発活動のうち、主なものは以下のとおりである。

黒塚桜まつり

柳本商工連盟・同青年部がおこなう「黒塚桜まつり」の際に、文化財に親しむ機会の一つとして、勾玉作りを体験する催しをおこなった。

日　　程　平成19年４月１日（日）

天理っ子遺跡探検隊

主に小学生を対象として市内の遺跡や古墳をめぐるハイキングを、平成17年度より教育委員会生涯学習課と共催している。クイズやゲームを取り入れて、文化財に関する知識が深まるよう工夫している。本年度は第３回目で、本市柚之内町周辺をめぐった。

遺跡探検隊（塚穴山古墳にて）

日　　程　平成19年11月17日（土）

行　　程　天理市役所→西山古墳→塚穴山古墳→峯塚古墳→西乗鞍古墳→内山永久寺→石上神宮→天理市役所

参 加 者　小学生・保護者　計31名

櫟本校区はにわ祭り

櫟本小学校でおこなわれる「はにわ祭り」の際に催された勾玉作り体験教室に、文化財課より講師を派遣した。

日　　程　平成20年２月２日（土）

4．刊行図書

平成19年度は下記の図書を新たに刊行した。

・天理市埋蔵文化財センターだより　Vol．4　　平成19年８月10日

黒塚古墳展示館を紹介する特集を掲載した。

・天理市埋蔵文化財センターだより　Vol．5　　平成19年12月１日

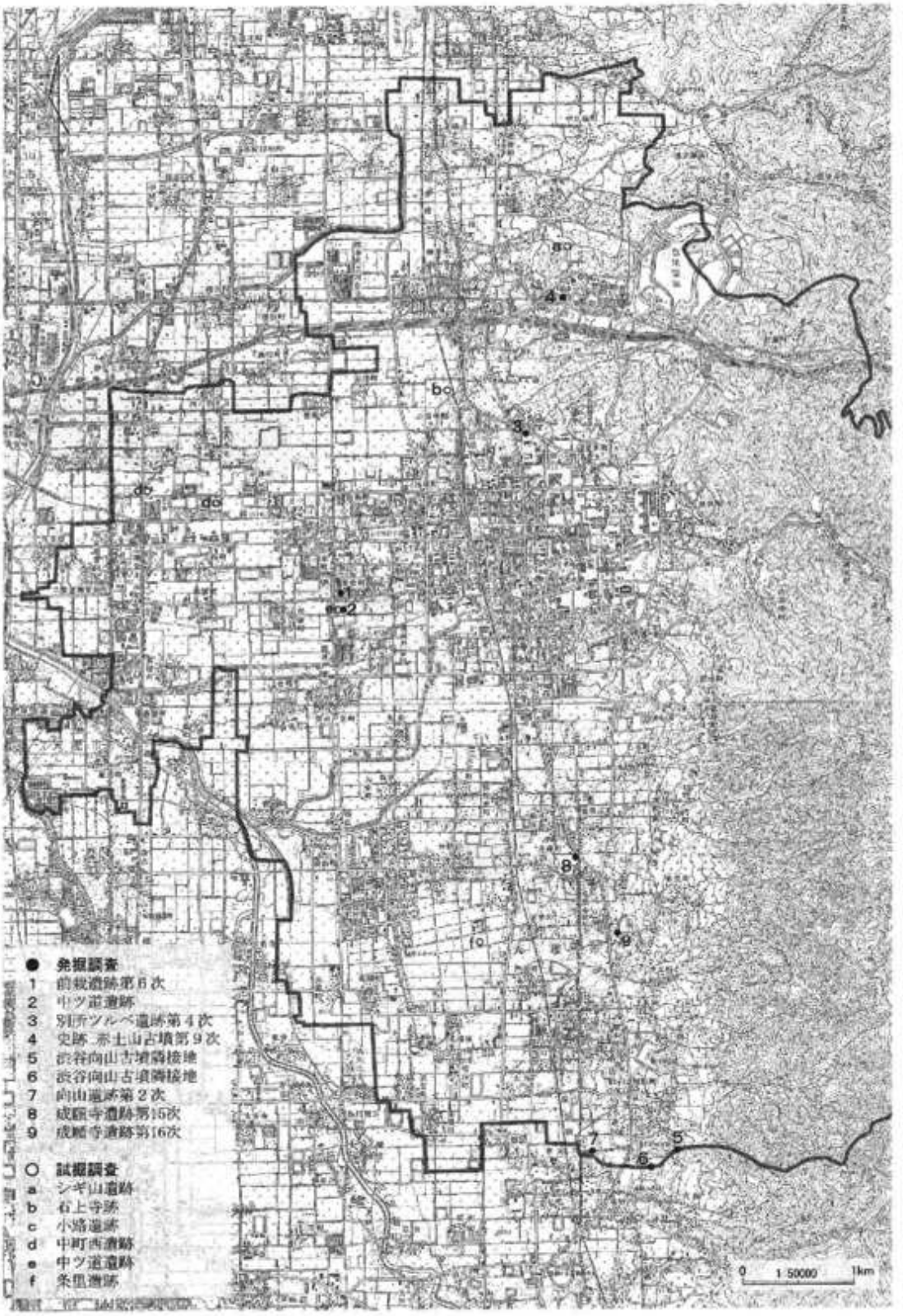
平成19年度冬の文化財展の展示内容にあわせて、平成18年度中におこなった８件の発掘調査成果を紹介した。

・天理市埋蔵文化財調査概報　平成13・14年度　　平成19年12月21日

長寺遺跡（第16次）、薬師遺跡の調査概要を掲載した。

・天理市文化財調査年報　平成18年度　　平成20年３月31日

平成18年度の事業内容と、柳本藩邸遺跡（第11次）、平等坊・岩室遺跡（第30次）の調査概要を掲載した。



第１図　平成19年度　発掘調査・試掘調査地点

第２章

史跡整備事業に伴う調査・範囲確認調査の概要

史跡 赤土山古墳（第９次）

Ⅰ．はじめに

天理市櫟本町に所在する赤土山古墳は東大寺山丘陵上に立地する全長106.5m以上の前方後円墳である。天理市教育委員会は昭和62年度以降、これまで８次にわたる調査を実施して、墳丘の範囲確認と構造の解明に努めてきた。それと並行して平成４年度に国指定史跡を受け、平成18年度には史跡整備事業を開始した。

Ⅱ．第９次調査に至る経過

範囲確認調査　昭和62年度に天理市櫟本町字赤土山の丘陵地においておよそ２万㎡におよぶ大規模な宅地開発が計画され、文化財調査に先行して工事が一部おこなわれる事態が発生した。開発計画地内には赤土山古墳（赤土山１号墳）・赤土山２号墳・赤土山３号墳が存在したが、工事により赤土山２号墳の半分が消滅し、赤土山３号墳も一部削平された。これをうけて、天理市教育委員会は赤土山３号墳について原因者負担による発掘調査をおこなって記録保存を図るとともに、赤土山古墳および赤土山２号墳の保存を前提とした範囲確認調査を開始した（第１次調査～第３次調査）。範囲確認調査は昭和62年度より平成２年度にかけて実施し、平成４年度に赤土山古墳および赤土山２号墳の残存範囲が国史跡に指定された。

史跡整備事業に伴う調査　史跡指定を受けたのち、平成７年度に整備基本計画（構想）を策定、平成８年度に史跡赤土山古墳整備委員会を発足した。続いて、家形埴輪祭祀遺構などの重要遺構や墳丘形態など、整備事業をおこなう上で必要な情報を得ることを目的とした発掘調査を平成10年度より平成14年度まで継続して実施した（第４次調査～第８次調査）。この過程で、それまで前方後方墳と想定していた墳丘が、実は古墳築造後に発生した地滑りにより大きく変形したもので、本来の墳形は前方後円墳であったことが明らかになった。こうした発掘調査によって得られた知見を踏まえて、平成16年度より測量地質調査、平成18年度より史跡整備事業を開始し、現在は平成21年度中の完了を目指して工事を進めている。

第９次調査　平成19年度からは園路整備などの工事を本格化しているが、その進捗に伴って工事内容を検討する過程で、後円部造り出し上面に園路を設けるための舗装工事の際に遺構への影響が生じることが懸念された。そこで、遺構の遺存状況や深度を確認し、適切な工法を選択するための情報を得ることを目的として新たに調査区を設定した（第９次調査）。今回の調査は後円部「造り出し」上面における初めての調査となった。

Ⅲ．古墳の位置

赤土山古墳の位置する天理市北部は、大和古墳群などが所在する天理市南部と並ぶ、奈良盆地内有数の古墳集中地帯である。

地　　形　第２図に奈良市帯解町から天理市森本町、櫟本町、別所町を含む地域を示した。この地域は東部の大和高原に発する菩提仙川、楢川、高瀬川などが盆地内に流れ込み、それぞれの間に低い丘陵地が盆地内に迫り出している。赤土山古墳が立地する東大寺山丘陵もその一つで、東大寺山古

1堀田池遺跡　2森本窪之庄遺跡　3十之庄遺跡　4愛ノ木遺跡　5湯水寺山遺跡　6寺山寺跡　7願興寺跡　8和堀森本遺跡　9八反田遺跡
10折ノ木原遺跡　11樋ノ前遺跡　12長寺遺跡　13長寺跡　14沂地遺跡　15砂地遺跡　16横本高窪遺跡　17シギ山遺跡　18横庄・横本城跡
19柿本寺跡　20東大寺山遺跡　21白川火葬墓群　22梯福ヶ谷遺跡　23遠栗鳥　24荒池遺跡　25在原遺跡　26井戸城跡　27薬師遺跡
28石上鋼錆出土地　29平尾山遺跡　30石上寺跡　31舞台遺跡　32田部遺跡　33別所遺跡　34別所窪遺跡　35別所ツルベ遺跡　36別所高山遺跡
37別所宮西遺跡　38袋窪遺跡　39豊田山遺跡　40布留遺跡三島（木寺）地区　41布留遺跡三島（神田）地区　42豊田寺跡　43布留遺跡（豊田）地区
44豊田山城跡　45布留遺跡三島（里中）地区　46布留遺跡　47石上神宮寺跡

A小林古墳群　B栗塚古墳　C上殿古墳　D野田古墳　E寺山古墳群　F高山古墳　G東大寺山古墳　H和署下神社古墳　I赤土山古墳
J東大寺山古墳群シギ山支群　K東大寺山古墳群　L和署小倉谷古墳群　M妙龍大塚古墳　N石上大窟古墳　Oウワナリ塚古墳　Pヘミ塚古墳
Q石上・豊田古墳群　R御高山古墳　S別所大塚古墳　T塚山古墳　U別所鐘子窟古墳　V袋塚古墳

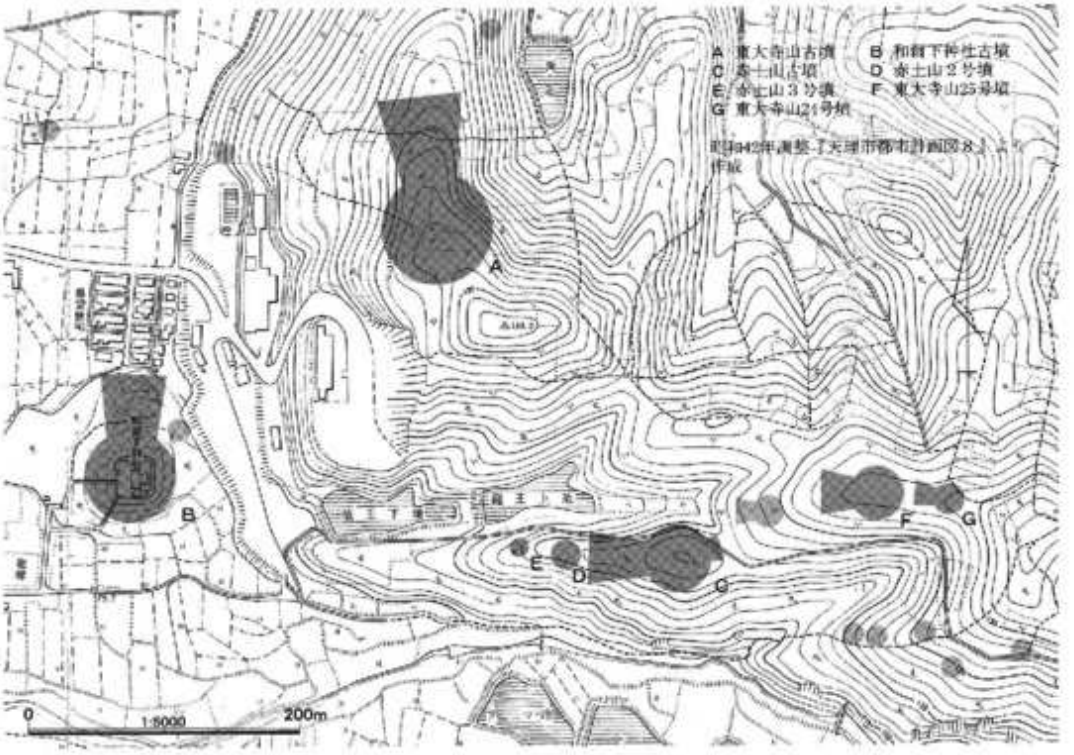
第２図　赤土山古墳周辺の遺跡

墳（G）南東の三角点（標高134m）を最高所とし、小規模な尾根と谷が入り組んだ複雑な地形を呈する（第３図）。かつては茶畑や果樹園が点在していたが、現在は宅地開発やシャープ株式会社総合開発センターの建設により地形改変が進んでいる。

古墳分布　この東大寺山丘陵には、全長140mの東大寺山古墳（G）、全長106.5m以上の赤土山古墳（I）、全長110mの和爾下神社古墳（H）といった100m以上の規模をもつ古墳時代前期の前方後円墳が築かれている。赤土山古墳が築造された尾根上には赤土山２号墳、赤土山３号墳が所在する。同じ尾根上の東大寺山24号墳、東大寺山25号墳も前期古墳とみる見解がある。古墳時代後期には横穴式石室を主体とする東大寺山古墳群（K）や同古墳群シギ山支群（J）が丘陵内に築かれた。丘陵裾部にあたる櫟本町内にも後期の墓山古墳（F）があり、さらに長寺遺跡や柿本寺跡の調査でも後期の埋没古墳が多数見つかっている。

東大寺山丘陵の北方には虚空蔵山より西に派生する丘陵地帯があり、ここにも古墳が密に分布する。古墳時代前期の上殿古墳（C）が知られているほか、古墳時代中期末～後期には、丘陵上の広い範囲に寺山古墳群（E）を含む大規模な群集墳が築かれたことが天理市や奈良県による近年の調査で判明した。和爾古墳群と呼ばれるこの群集墳の規模は350～500基にのぼると想定されている。

一方、東大寺山丘陵の南側には高瀬川が岩屋谷を形成し、その南側に豊田山丘陵が展開する。岩屋谷には岩屋大塚古墳（M）が立地し、豊田山丘陵の北側斜面には全長107mの石上大塚古墳（N）、全長110mのウワナリ塚古墳（O）が並んで築造されている。いずれも後期の前方後円墳で内部主体は横穴式石室である。このほかにも、岩屋谷一帯にはハミ塚古墳（P）などの後期・終末期古墳が点在し、豊田山丘陵には総数200基以上といわれる石上・豊田古墳群（Q）が広がる。



第３図　東大寺山丘陵の古墳分布

Ⅳ．現況と既往の調査成果

１．既往の調査成果

天理市教育委員会は昭和62年度以来８次にわたって赤土山古墳の発掘調査を実施してきた（松本(編) 2003)。第８次調査までの概要を以下に抄録するが、後円部造り出しについては次節で詳しく述べることにする。

墳　丘　前方部を西、後円部を東に向ける上下２段築成の前方後円墳である。前方部前端から後円部造り出し先端までの残存長は106.5m、後円部径は66mに復元される。調査開始当初は前方後方墳として認知されていたが、古墳築造後の地滑りによって形成された滑落崖のために墳形を誤認していたことが判明した。後円部東側には造り出しをもつ。

外部施設　墳丘各斜面には葺石が施されている。また、後円部墳頂と上段・下段斜面間の平坦面に埴輪列が樹立されている。埴輪列は円筒埴輪と朝顔形埴輪が中心だが、後円部南側では墳頂から転落したと思われる蓋形埴輪、短甲形埴輪、盾形埴輪などの器財埴輪の破片が多数出土した。また、後円部造り出し南側で発見された祭祀遺構には家形埴輪などが多数並べられていた（家形埴輪祭祀遺構)。

埋葬施設　中心主体の調査はおこなっていないが、後円部の調査成果からみて地滑りにより破壊されているものと考えられる。埋葬施設は粘土槨と推定され、後円部南側の堆積土から粘土槨の残片や朱の一部を検出しているほか、石製腕飾類や石製模造品などの副葬品が出土している。

時　期　これまで出土した円筒埴輪は川西宏幸氏の円筒埴輪編年Ⅱ期に相当する。後円部南側で出土した石製品の編年観をあわせると、赤土山古墳の時期は古墳時代前期末～中期初頭に位置付けることが可能である。

地滑り　後円部南側で出土した埴輪列の状況から、築造後間もない時期に地滑りが発生したことが判明した。墳丘および周辺部には随所に地滑り地形が認められ、地滑りが繰り返し発生したことが窺われる。度重なる地滑りは奈良盆地を周期的に襲った地震によるものと想定されている。

２．後円部造り出し

次に、後円部造り出しの現況と周辺の調査成果について略述する。

現　況　後円部造り出しは後円部東側に取りつく墳丘の突出部で、墳丘全体の平面形をみると、双方中円形ともとれる形状を呈する。ただし、現況から推定される造り出しの配置は、墳丘主軸より若干北東方向に偏している。造り出し上面の標高は現況で113.5m前後、前方部と後円部の鞍部の標高は現況で113.94mであり、側面観では造り出しと前方部の高さは大差ない。こうしたことから、本市所在の櫛山古墳のように、後円部に両方向から方形の墳丘が取りついているような印象も受ける。古墳の造り出しは主墳丘の下段斜面ないし基底部に取りつく低平な土壇状を呈するのが一般的だが、赤土山古墳のそれは上段斜面に取りつき、後円部と平坦面を共有する点が最大の特色といえる。

造り出しは周辺開発により形状が損なわれており、現況の観察からは本来の形状を推定することはできない。特に東側および北側の改変が著しく、本来の規模はわからない。現在では造り出しが三角形状になっていることが測量図からも読み取れる。形状が損なわれた時期は明らかでないが、隣接する工場の独身寮建設に関連する可能性がある。整備工事の進捗に伴い、現在は後円部北側から延びるスロープが盛土により施工され、造り出しの損壊部分を補うような形状に仕上げられている。

第４図　赤土山古墳測量図

第５図　赤土山古墳調査区位置図

第４表　赤土山古墳におけるこれまでの調査

調査次数	調査期間	調査地点	調査面積	調査担当	検出遺構	出土遺物	文献
（工事立会）	昭和59年１月９日			泉武	後円部北東斜面 埴輪列	円筒埴輪	
第１次調査	昭和62年８月17日～ 昭和63年１月31日	範囲確認調査 第１～５調査区	120㎡	松本洋明	墳丘北面の調査 埴輪列、葺石	円筒埴輪、朝顔形埴輪、 短甲形埴輪、布留式土器	（1） （4）
〃	昭和63年５月９日～ 昭和63年７月８日	範囲確認調査 第７～10調査区	190㎡	松本洋明	墳丘南面の調査 葺石	埴輪破片、短甲形埴輪、 蓋形埴輪、扇形埴輪	（1） （4）
第２次調査	平成元年８月28日～ 平成元年11月30日	範囲確認調査 第11～13調査区 （第13－A・B・C区）	234㎡	松本洋明	後円部東面南面の調査 葺石、埴輪列	円筒埴輪、家形埴輪、 鶏形埴輪、 須恵器	（2） （4）
第３次調査	平成２年９月14日～ 平成２年11月30日	範囲確認調査 第２調査区拡張 （第２－A・B・C区）	139㎡	松本洋明	前方部北面の調査 葺石、埴輪列	円筒埴輪、 土師器破片	（3） （4）
※平成４年12月15日文部省告示第115号　国史跡に指定される。							
第４次調査	平成11年１月５日～ 平成11年３月31日	整備計画調査 第13調査区拡張 （第13－B・C・D・E区）	26㎡	松本洋明	後円部東面の調査 家形埴輪祭祀遺構、 葺石、埴輪列	円筒埴輪、家形埴輪、 盾形埴輪 須恵器	（4）
第５次調査	平成11年８月５日～ 平成11年11月30日	整備計画調査 第15・16調査区	61㎡	松本洋明	くびれ・前方部北面の調査 葺石、埴輪列	円筒埴輪	（4）
第６次調査	平成12年７月12日～ 平成12年11月30日	整備計画調査 第18調査区 （第18－西・東区）	140㎡	松本洋明	後円部南面の調査 集積遺構、埴輪列	円筒埴輪、短甲形埴輪、 盾形埴輪、蓋形埴輪、 石製模造品	（4）
第７次調査	平成13年８月23日～ 平成14年３月31日	整備計画調査 第８・12・18・19調査区	320㎡	松本洋明	後円部南面の調査 埴輪列	円筒埴輪、朝顔形埴輪	（4）
第８次調査	平成14年５月１日～ 平成14年８月30日	整備計画調査 第17・18・20調査区	192㎡	松本洋明	くびれ・後円部先端の調査 埴輪列	円筒埴輪	（4）
第９次調査	**平成19年12月19日～ 平成19年１月18日**	**整備工事に伴う調査 第21調査区**	**21㎡**	**石田大輔**	**後円部造り出し 埴輪列**	**円筒埴輪**	**本書**

〔参照文献〕（１）　松本洋明（編）1989『赤土山古墳　第１次範囲確認調査概報』天理市教育委員会
（２）　松本洋明（編）1990『赤土山古墳　第２次範囲確認調査概報』天理市教育委員会
（３）　松本洋明（編）1991『赤土山古墳　第３次調査概報』天理市教育委員会
（４）　松本洋明（編）2003『赤土山古墳　第４次～第８次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会

第５表　調査区一覧

調査区	調査年度	調査次数	調査面積	調査地点	検出遺構
第１調査区	昭和62年度	第１次調査	15㎡	前方部先端	張り割り、埴輪列K
第２調査区	昭和62年度	第１次調査		前方部北斜面	埴輪列D、葺石
第２－A調査区	平成２年度	第３次調査	60㎡	〃	〃
第２－B調査区	平成２年度	第３次調査	39㎡	〃	葺石
第２－C調査区	平成２年度	第３次調査	40㎡	前方部先端	〃
第３調査区	昭和62年度	第１次調査	40㎡	くびれ部北斜面	埴輪列C、葺石、小石室
第４調査区	昭和62年度	第１次調査	30㎡	後円部北斜面	葺石、短甲形埴輪転用裕
第５調査区	昭和62年度	第１次調査	16㎡	２段墳南斜面	埴輪列K
第６調査区	（欠番）				
第７調査区	昭和63年度	第１次調査	69㎡	前方部南斜面裾	
第８調査区	昭和63年度	第１次調査	40㎡	後円部南斜面	葺石
第９調査区	昭和63年度	第１次調査	19㎡	〃	
第10調査区	昭和63年度	第１次調査	63㎡	前方部南斜面	葺石
第11調査区	平成元年度	第２次調査	100㎡	後円部南斜面	埴輪列G、葺石
第11調査区	平成元年度	第２次調査	40㎡	〃	葺石
第13－A調査区	平成元年度	第２次調査	40㎡	後円部先端	家形埴輪群、埴輪列F
第13－B調査区	平成元年度	第２次調査	6㎡	〃	家形埴輪群、埴輪列E
第13－C調査区	平成元年度	第２次調査	8㎡	〃	埴輪列E、葺石
第13－D調査区	平成10年度	第４次調査	6㎡	〃	家形埴輪群、葺石
第13－E調査区	平成10年度	第４次調査	6㎡	〃	盾形埴輪、葺石
第14調査区	（欠番）				
第15調査区	平成11年度	第５次調査	36㎡	北くびれ部	埴輪列B、葺石
第16調査区	平成11年度	第５次調査	25㎡	前方部北斜面	葺石、小石室
第17調査区	平成14年度	第８次調査	40㎡	南くびれ部	埴輪列J、葺石
第18－東調査区	平成12・13年度	第６・７次調査	84㎡	後円部南斜面	埴輪列H、集石遺構、柱穴
第18－西調査区	平成12・13年度	第６・７次調査	56㎡	〃	埴輪列H・I、葺石
第19調査区	平成13年度	第７次調査	100㎡	〃	葺石
第20－A調査区	平成14年度	第８次調査	8㎡	後円部造り出しくびれ部	埴輪列A、葺石
第20－B調査区	平成14年度	第８次調査	2㎡	後円部北斜面	埴輪列A
第20－C調査区	平成14年度	第８次調査	2㎡	〃	
第21調査区	**平成19年度**	**第９次調査**	**21㎡**	**後円部造り出し**	**埴輪列L、葺石**

第13調査区（第16図）　造り出しの南側で平成元年度および同10年度に調査をおこなった。造り出しは後円部墳丘と同様の２段築成で、斜面には基底石を備える葺石が施されている。上段・下段斜面間の平坦面では家形埴輪を主体とする祭祀遺構を検出した。また、この平坦面では造り出しの南裾に沿って埴輪列が樹立されていた（埴輪列Ｅ）。基底石列と埴輪列の配置から後円部への造り出しの取りつき方が明らかになり、造り出し南側の平面形を確定する根拠が得られた。

第20調査区（第16図）　造り出しの北側で平成14年度に調査をおこなった。後円部北側の段築面の埴輪列を検出した（埴輪列Ａ）。特に、第20－Ａ調査区では、埴輪列に加えて、造り出し北側の取りつく部分と考えられる墳丘面の傾斜変換を確認しており、造り出し北側の平面形を知る手がかりが得られた。なお、後円部北東側では一連の発掘調査に先立つ昭和58年度に削平工事に伴う立会を実施しており、その際にも埴輪列（円筒埴輪13基）を検出している。

写真１
南側からみた赤土山古墳

写真２
第13調査区調査風景
（平成元年度 南から）

Ⅴ．第９次調査の成果

１．経過

調査は平成19年12月19日に開始し、平成20年１月18日に完了した。作業員による実働期間は９日間であったが、調査期間中に年末年始や降雨、降雪などによる作業中断期間を挟んだため、調査完了まで１ヶ月弱を要した。

調査は遺構面までの深さを確認することを主目的としたため、計画段階における調査区は最小面積を基本とせざるを得なかった（第６図）。当初は0.5m×9.5mの南北トレンチと0.5m×9.0mの東西トレンチによる十字形の調査区を、一部が後円部斜面にかかるように設定した。調査中に埴輪列を確認したため部分的にトレンチを拡張し、最終的な調査面積は約21㎡となった。

第６図　第21調査区座標図

２．層序（第７図）

遺構の残存状況を確認することを調査の主眼に置きつつ、東西方向に断割をおこなうことで層序の確認にも努めた。（本文中の層位の記載は特に記すものを除き第７図断面A-A′の層位番号を示す）

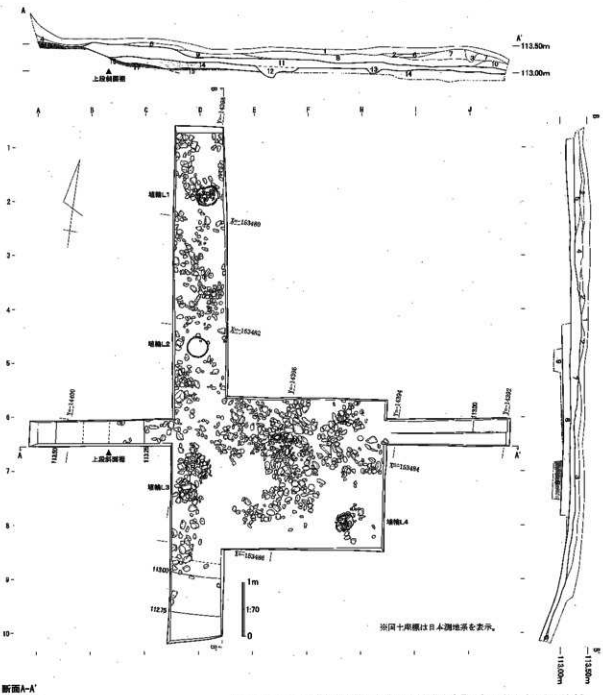
表土（１層）を除去すると、比較的新しい時期の堆積層を確認した（４～10層）。４層からは近現代の瓦片、８層からは近現代のガラス破片が出土している。11層はにぶい黄橙色砂質土で埴輪片や転落石を含み、後円部からの流土と考えられる。14層は淡黄色砂質シルト層で埴輪片などの遺物は含まず、墳丘を整地する土層と考えられる。15層はにぶい黄橙色シルトを基調とする土層で、墳丘本体の盛土と判断した。16・17層は地山である。

墳丘本体を盛土（15層）で形成し、埴輪列の樹立と同時に整地土（14層）を施している。後円部については調査範囲内では盛土等は認められないが、標高113.25m付近で地山（16・17層）が後円部頂に向かって立ち上がる様子が観察でき、これを後円部裾と判断した。それより上方は、トレンチ西端から１m付近で削平を受けており、その影響で現況の後円部裾が本来の位置から墳頂よりに後退していることがわかる。この部分から近現代の瓦が出土しており（４層）、後円部裾が削平を受けた時期を示すものとみられる。また、造り出し上には地山由来と思われるブロックを含む土層が各所に見られることから（５・６層）、後円部裾を削平した際の排土が造り出し上面に残された可能性もある。造り出しの残存部分も後世の改変による影響をかなり受けていることが窺える。

３．遺構

（１）葺石（第７図）

後円部斜面は前述のように削平を受けており、基底石を含めて葺石は遺存していなかった。造り出し上面では多数の石群を検出した。そのなかには後円部斜面からの転落石が多量に含まれていたが、



断面A-A'

1　表土
2　10YR5/1 褐灰色砂質土
3　10YR5/1 褐灰色砂質土〔撹乱〕
4　10YR5/1 褐灰色砂質土 近現代の瓦を含む
5　10YR5/4 浅黄橙色シルト φ２cm程度の礫を含む
6　10YR7/8 黄橙色シルト φ２cm程度の礫を含む
7　2.5Y7/2 灰黄色砂質土 φ１cm程度の礫を含む
8　2.5Y7/4 浅黄色砂質土 ガラス片を含む
9　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
10　5Y8/3 淡黄色シルト φ２cm程度の礫を含む
11　10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土 転落石・埴輪片を多量に含む〔後円部からの流土〕
12　10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土 しまり弱い〔土坑埋土〕
13　10YR7/2 にぶい黄橙色砂質土 しまり弱い〔土坑埋土〕
14　2.5Y8/3 淡黄色粘質シルト に
　10YR7/8 黄橙色粘土ブロック ・
　5Y8/1 灰白色シルトブロック を含む〔盛地土〕
15　2.5Y7/6 黄色砂質土 φ２cm程度の礫を少量含み、
　2.5Y8/2 灰白色シルトブロックを含む〔盛土〕
16　7.5YR7/8 黄橙色砂質土 φ１cm程度の礫を含む〔地山〕
17　5Y8/1 灰白色粘質シルト〔地山〕

断面B-B'

1　表土
2　10YR5/4 浅黄橙色シルト φ２cm程度の礫を含む
3　断面A-A' 9層に対応
4　2.5Y7/4 浅黄色砂質土
5　2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土
6　5Y8/3 淡黄色シルト
7　断面A-A' 11層に対応
8　断面A-A' 14層に対応
9　断面A-A' 15層に対応

第７図　第21調査区平面図・土層図

それらの転落石についても上位にあるものを除いて、基本的に転落状況を保存・記録した。また、14層上面にじかに葺かれた石群が部分的に残っており、これを造り出し上面の石敷きと認定した。転落石には人頭大のものが含まれていたが、石敷きと認定したものはすべて拳大以下の円礫で14層に葺かれていた。石敷きの厚みは石ひとつ分程度であった。これと同様の石敷きは赤土山古墳におけるこれまでの調査でも検出されており、北側くびれ部や造り出し南側家形埴輪祭祀遺構付近における後円部上段・下段斜面間の平坦面で部分的に確認されている（第13調査区・第15調査区）。

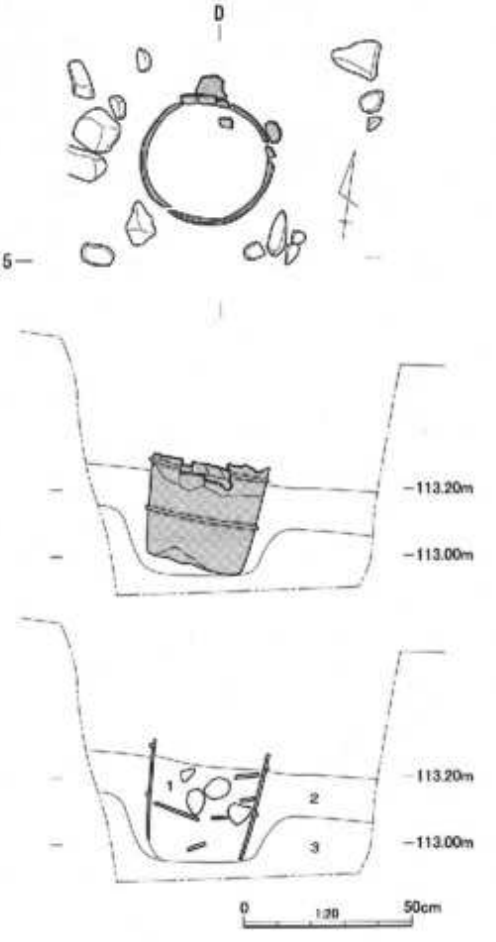
（２）埴輪列（第７図）

北トレンチ掘削中に普通円筒埴輪２基を検出したため、調査期間の範囲内で調査区を最大限拡張して、埴輪列の解明に努めた。南北トレンチは調査区幅を1.0mに拡張した結果、埴輪３基を確認した。さらに、埴輪列が造り出し上で方形に並ぶ可能性を考慮して東トレンチを拡張した結果、もう１基を検出した。これまでの調査で検出した埴輪列を「埴輪列Ａ～Ｋ」と呼称していることから、今回検出したものを埴輪列Ｌ（Ｌ１～Ｌ４）と呼称する。

配　　列（第７図）　Ｌ２およびＬ３について断割調査をおこなったところ、底部が原位置を保っていた。このことから類推すると、断割調査をおこなっていないＬ１およびＬ４についても同様にほぼ原位置を保つものと判断できる。埴輪列の樹立間隔は、Ｌ１～Ｌ３は中心間の距離がそれぞれ約2.8m、Ｌ３～Ｌ４は中心間の距離が約3.0mである。Ｌ１～Ｌ３は直線上に並ぶが、このラインとＬ３～Ｌ４がなす角は100度ほどである。角度が直角にならない原因として、配列が造り出しの形状を反映している可能性が考えられる。第21調査区の面積が限られているため全体の配列はわからないが、現況からみて、少なくともＬ４の東側にさらに１基遺存している可能性がある。

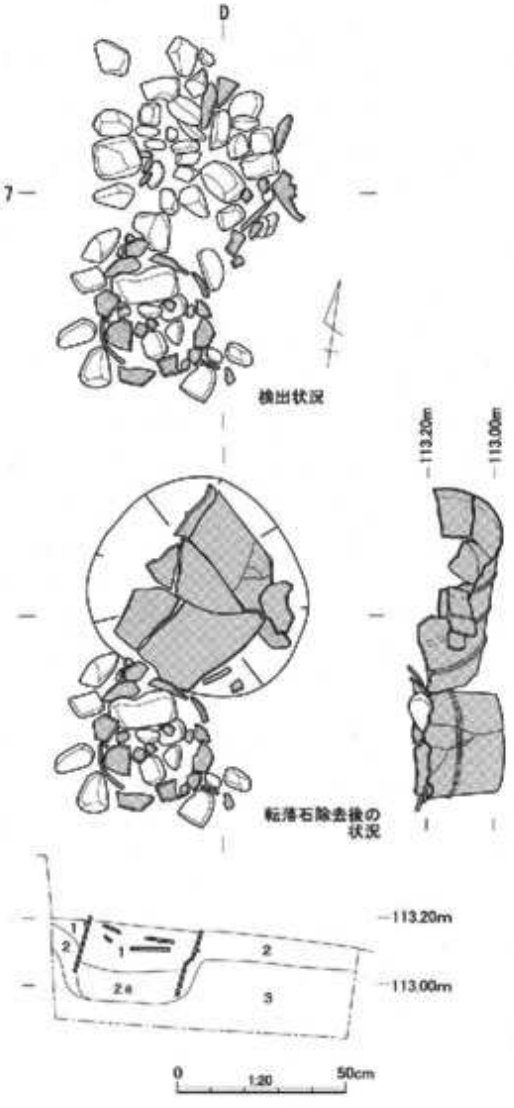
樹立状況（第８図、第９図）　Ｌ２およびＬ３について断割調査をおこなって樹立状況を確認した。

Ｌ２は、整地土層上面（14層上面）の精査を繰り返したものの掘方を確認できなかったが、盛土層上面（15層上面）では掘方を確認することができた。掘方の平面は径35cm程度の円形である。２条目突帯の高さと検出面がほぼ対応しており、２条目突帯より上位は後円部からの流土と転落石により破壊されていた。東側にやや傾斜しているが、本来垂直に樹立されていたものが後円部からの流土により若干変



1　断面A-A' 11層に対応（後円部からの流土）
2　断面A-A' 14層に対応（整地土）
3　断面A-A' 15層に対応（盛土）

第８図　埴輪Ｌ２出土状況



1　断面A-ｽﾞ11層に対応〔後円部からの流土〕
2　断面A-ｽﾞ14層に対応〔整地土〕
2a　2.5Y8/3 淡黄色シルト
3　断面A-ｽﾞ15層に対応〔盛土〕

第９図　埴輪Ｌ３出土状況

位したものと考えられる。埴輪内の埋土のうち、上層は転落石や埴輪片を含む流土であり、下層は埴輪設置の際の置き土である。

Ｌ３もＬ２と同様に整地土層上面（14層上面）では掘方を確認することができず、盛土層上面（15層上面）で確認した。掘方の形状や大きさ、埴輪内の埋土の状況もＬ２と同様である。検出面は２条目突帯の高さよりやや低位に対応していた。

さらに、Ｌ３は上段部分が北側に倒壊したような状態で出土した。倒壊していた上段部分は、下位の半周分が口縁部までほぼ原形をとどめていた。一方、上位の半周分は後円部からの流土に破壊されており、破片が転落石と混淆して出土する状況であった（第９図）。出土状況からみて、整地土層（14層）に掘り込まれた土坑内に上段部分が横倒しにされたのち、後円部からの流土によって上位が破壊されたものとみられる。いかなる性格のものかわからないが、樹立後のいずれかの時点で人為的に横倒しにされたと考えられる。

埴輪樹立工程の復元　以上の事実から埴輪の樹立工程を復元すると以下のようになるだろう。

- 盛土により造り出し本体を造成する。
- 盛土面（15層）に埴輪樹立のための掘方を掘削する。
- 普通円筒埴輪を設置する。埴輪内にも底部を安定させるため、土（第９図2a層）を入れる。
- 普通円筒埴輪の周囲に整地土（14層）を入れる。整地土は円筒埴輪の２条目突帯の高さかそれより少し低い程度まで達する。

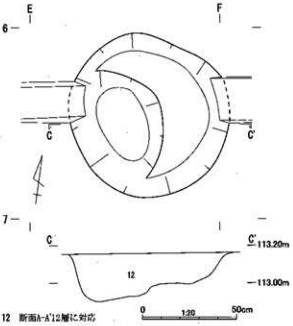
以上のように、墳丘造成→掘方掘削→埴輪樹立→整地という工程を復元したが、これは北側くびれ部の埴輪列Ｂ（第５次調査：第15調査区）で確認された工程と同様である。後述するように埴輪列Ｌの普通円筒埴輪は５条６段に復元されるので、造り出しの造営が完了した時点では、４段分が地上に露出した状態で立ち並んでいたと考えられる。

（３）土坑（第10図）

調査区の中央付近で土坑を検出した。土坑は東西8.6m、南北8.7m、深さ0.25mで、平面形は円形を呈する。埋土からは埴輪片と転落石が入り混じった状態で多量に出土した。この土坑は14層を掘り

込んでおり、11層にはその兆候は認められなかったことから、11層の堆積以前のものとみられる。何らかの樹立物の抜き取った掘方に転落石を含む流土が堆積したものである可能性も考慮したが、埋土には樹立物の抜き取りを示す痕跡は認められなかった。このことから、古墳築造後の早い時期に二次的に形成された攪乱坑である蓋然性が高いと判断する。ただし、攪乱の時期を示すような遺物は出土していない。

出土した埴輪片には円筒埴輪のほか、朝顔形埴輪ような形状の口縁部や頸部などの破片を含んでいる。出土遺物の項で述べるが、同一個体ではなく複数個体の破片が混淆して出土する状態であった。



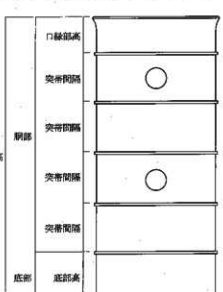
第10図　土坑平面図・土層図

Ⅴ．出土遺物

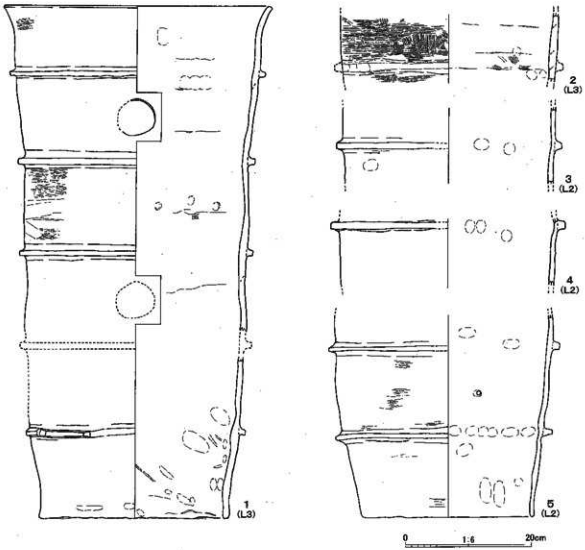
１．普通円筒埴輪（第12図１～５、第14図14・15、図版７）

埴輪列Ｌにおいて原位置を保って出土した４基の普通円筒埴輪のうち、Ｌ２（５）およびＬ３（１）を取り上げた。このうち、Ｌ３については埴輪列Ｌの普通円筒埴輪の全形を復元する材料となった。また、土坑や流土中から出土したものも図化した。

形　態　前述したように、１（Ｌ３）・５（Ｌ２）は底部～第２段が残存していた。このうち、１下は第２段突帯より上段が失われていたが、そのすぐ北側において、上段部分と思われる破片が原形を半周分とどめた状態で出土した。上段部分は３条４段あり、口縁部まで残存している（１上）。底部～第２段と上段部分の間には接合関係がないが、これを同一個体と仮定すると、それぞれの残存状況からみて１の全形は５条６段に復元することが可能である。提示した実測図は第２段および第３段の突帯間隔が第４段の突帯間隔と同じであると仮定して作成したものである。この復元は、造り出し南側の第13調査区で出土したＥ50（第20図参照）ともよく一致しており、妥当性は高い。１の透孔は第５段に１ヶ所穿たれているのが確認できるが、Ｅ50の透孔配置とあわせて考えると、本来は第３段と第５段に２方向穿たれていたものとみられる。１の透孔の形状は円形で、他に今回の調査で出土した破片に確認できる透孔の形状も円形に限られている。口縁部は緩やかに外反する形状を呈する。



第11図　部分名称と計測部位



第12図　埴輪列Ｌ出土埴輪

５（Ｌ２）については原位置を保っていたのは底部から第２段までであったが)、本来は１（Ｌ３）と同様の形態を有していたものと考えられる。なお、５の第２段には焼成前に穿孔されたとみられる径0.8cm程度の小円孔が１ヶ所確認できる。

法　量　埴輪列Ｌから出土した円筒埴輪の法量は次の通りである。１と５は底部高と突帯間隔を確認することができる。底部高は１が14.0cm、５が13.8cmである。突帯間隔は各段とも14cm前後である。口縁部高は１のみ判明しており、10.2cmを測る。底部径は１が30.3cm、５が27.8cmである。先に述べたように、１については全形を５条６段に復元することができ、確定できない第２段・第３段の突帯間隔を14cmと仮定すると、全高は81.8cmに復元される。

14、15も普通円筒埴輪の底部である可能性がある。15は底部径約35cmを測り、埴輪列Ｌを構成する１、５に比較して径が大きい。また、15は残存高16.5cmを測るが突帯の痕跡が認められず、底部高が埴輪列Ｌのものを上回っている。外面をタテハケにより仕上げている点も含め、埴輪列Ｌとは異なる規格の埴輪である可能性があり、注意を要する。

突　帯　突帯の形状は断面台形が基本的であるが、端部が丸みを帯びたものも見られる。１に

見るように、同一個体でも突帯の断面形状の差異が認められる。器壁への貼り付け後にナデ調整により仕上げるのを基本とし、補充技法が観察される個体はない。突帯間隔設定技法については、刺突技法を施すものは見あたらず、突帯剥離面にやや強いヨコナデをおこなう個体（２）が認められるのみである。

成　形　底部付近の成形は全般に明瞭でなく、底部と上段の器壁の厚みもそれほど変化しない。唯一、15は高さ9.5cm付近の内面に接合痕があり、粘土板により成形する底部と粘土紐により成形する上段の境界を示す可能性がある。２は内面の接合痕を比較的よく残しており、幅2.5cm程度の粘土紐の積み上げを想定できる。

調　整　多くは器壁の摩滅が著しく調整の識別が困難だが、外面はヨコハケ、内面はナデを基本に仕上げている。底部径が大きい15のみ外面をタテハケで仕上げるようである。ヨコハケが施される個体では、いずれも器壁に工具の静止痕は認められない。１の底部付近には内面に引っ掻いたような鋭利な痕跡が残っており、調整に何らかの工具を用いていたことを示唆する。また、突帯部分の内面を強くユビオサエする個体も見受けられる（５など）。

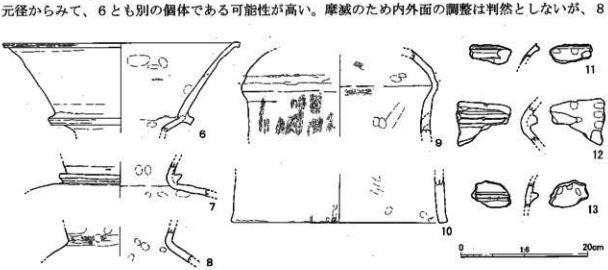
そ の 他　表面が摩滅した個体が多いが、焼成は概ね良好で、色調は橙色を呈するものが多い。一部の個体には黒斑が認められる。胎土は概ね均一であり、個体ごとに著しい差異は認められなかった。

２．その他の埴輪

朝顔形埴輪か（第13図６～13、図版８）

６は口縁部の破片で二重口縁形をとる。口径38.2cm、残存高14.3cmである。外反する１次口縁部に擬口縁をつくり、２次口縁の積み上げ後に口縁部突帯を貼り付けしている。内外面ともにナデによる仕上げである。このほかに、11も口縁端部付近の破片であるが、端部をつまみ上げる形状に特徴があり、６の口縁端部とは異なるようである。６と11は別個体である可能性が高い。

７・８は頸部の破片である。７には頸部突帯がみられるが、８には突帯の剥離痕が残るのみである。７と８では頸部より下位の開き方に差があり、別個体であることは明らかである。また、７・８は復元径からみて、６とも別の個体である可能性が高い。摩滅のため内外面の調整は判然としないが、８



第13図　土坑内出土埴輪

の突帯剥離部分にはタテハケが残る。12も頸部の破片と思われるが、下位の開き方からみて８と同一個体である可能性がある。

９は肩部と思われる破片である。肩部が大きく外側に張る形状であり、胴部はやや緩やかに湾曲している。最大径は15.8cmで、赤土山古墳のほかの朝顔形埴輪と比較するとかなり小振りである。最大径を測る部分のやや上位に何らかの剥離痕がある一方、胴部には突帯の痕跡はない。ほかの個体に比べて器壁はやや厚い。内面の調整は判然としないが、外面はタテハケで仕上げている。

10は底部と思われる破片である。小破片ではあるものの底部径は35cm程度に復元することができ、埴輪列Ｌの円筒埴輪よりも大型である。器壁が比較的厚手であり、普通円筒埴輪とは異なる可能性もある。

前述したように、これらはいずれも調査区中央付近で確認した土坑内から、破片となって出土したもので、同一個体の破片ではなく複数個体の破片が含まれている。ここまで、一応朝顔形埴輪として記述を進めたが、これまでに赤土山古墳で知られている朝顔形埴輪と比較すると相違点が多い。口縁部（６）については口径38.2cmと小振りであり、肩部と思われる破片（９）も胴部径31.6cmとかなり小さい。また、この破片には突帯の痕跡のような剥離痕も見られるものの、最大径を測る部分より高い位置にあり、これまでに出土している朝顔形埴輪の突帯の位置とは異なる。さらに、土坑内から出土した破片のなかに鰭の破片が見あたらないことも注意される。全形が明らかでないため確定はできないが、壺形埴輪や蓋形埴輪の一部である可能性も考慮に入れる必要があろう。

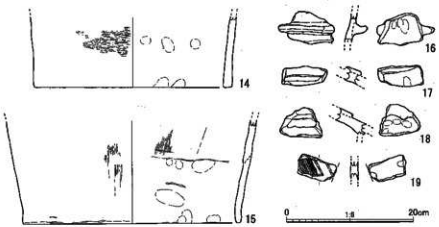
蓋形埴輪（第14図17～18、図版８）

17・18は蓋形埴輪の笠部中位突帯付近と考えられる破片である。17は突帯上面の幅が辛うじて判明する個体で、幅約2.5cmを測る。18も突帯が部分的に残る破片で、破面の状況からみて胴部と笠部の接合部にあたると思われる。

その他（第14図16・19、図版８）

16は器種・部位のわからない小破片で、大きく突出する特徴的な突帯をもつ。

19は線刻のある小破片ある。片面にのみ線刻があり、幅２mm程度の線刻が３本確認できるほか、さらに細かい線刻が部分的に施されている。一辺は破面ではなく生きているが、これが透孔にあたるものかどうかは小片であるため判断が難しい。



第14図　流土内出土埴輪

３．小　結

赤土山古墳におけるこれまでの調査で出土した埴輪は、いずれも川西宏幸氏による円筒埴輪編年（川西1978）のⅡ期に位置付けられていた。今回の第９次調査で出土した資料についてもその範疇で捉えうるものである。普通円筒埴輪の割付方式については（縫方2003）、全形の判明した１（Ｌ３）は底部高と突帯間隔がほぼ等しく、その他の個体についても同様とみられる。

詳細は後述するが、赤土山古墳の普通円筒埴輪には器高100cm程度の大型品と器高80cm程度の小型品が存在することが知られていた（松本(編)2003）。今回の資料は小型品に属すると判断することができる。

第６表　出土埴輪観察表

番号	器種	部位	残存率	出土位置	高さ	径	外面調整	内面調整	色調	備考
1	普通	口縁～底部	底部全周 口縁～胴	埴輪Ｌ３ 原位置	81.8 復元	口径42.6 底径30.3	ヨコハケ、一部ナナメハケ、突帯ヨコナデ	ほぼ摩滅 一部指頭圧、ナデ	外面：明黄褐色～淡黄色 内面：橙色	内面に工具痕あり、円形透孔
2	普通	胴部	1/4	埴輪Ｌ３ 埴輪内斜土	10.8	胴部最大径35.9	ヨコハケ、一部不定方向ハケ	ほぼ摩滅 一部指頭圧、ハケ	外面：淡黄橙色 内面：にぶい橙色	粘土紐接合痕、外面のハケ調整痕跡、突帯剥離部分に凹隣？、外面に赤彩の可能性あり
3	普通	胴部	1/8	埴輪Ｌ２	12.0	胴部34.3	摩滅のため不明	摩滅のため不明	外面：橙色	突帯剥落部分の内面に指頭圧
4	普通	胴部	1/8	埴輪Ｌ２	10.7	胴部34.4	摩滅のため不明	摩滅のため不明	外面：黄橙色	突帯剥落部分の内面に指頭圧
5	普通	底部	底部全周	埴輪Ｌ２ 原位置	32.5	底径27.8	ヨコハケ、突帯ヨコナデ	ほぼ摩滅 一部指頭圧	外面：浅黄橙色～褐灰色 内面：橙色	２段目に接成痕跡あり、外面沿線あり
6	不明	口縁	1/6	土坑	14.3	口径38.2	ナデ	ほぼ摩滅	外面：黄橙色	口縁部の焼き分強が明瞭
7	不明	胴部	1/3	土坑	5.6	突帯突帯間隔15.6	ほぼ摩滅 一部タテハケ	ほぼ摩滅 一部指頭圧、ナナメハケ？	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	外面の突帯剥離部分にタテハケが観察できる
8	不明	胴部	1/8	土坑	5.6	突帯剥離部径16.5	ナデ	ナデ、指頭圧	外面：明赤褐色 内面：にぶい黄橙色	外面の突帯剥離部分にタテハケが観察できる
9	不明	胴部	1/3	土坑	13.6	最大径15.8	タテハケ	タテハケ、ヨコハケ 一部指頭圧	外面：橙色 内面：橙色	突帯剥離部分に凹みあり（接合のための凹隣か）
10	不明	底部	1/8	土坑	7.4	底径34.8	ほぼ摩滅 一部タテハケ	ほぼ摩滅 一部指頭圧、ナナメハケ？	外面：橙色 内面：橙色	粘土紐間（１～８）より厚く、粘土紐成形
11	不明	口縁	破片	土坑	2.3	—	ヨコナデ	ヨコナデ	外面：橙色 内面：明褐色～灰黄褐色	
12	不明	胴部	破片	土坑	6.7	—	ほぼ摩滅 一部ヨコナデ	ナデ	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
13	不明	突帯部	破片	土坑	4.3	—	ほぼ摩滅	ナデ、指頭圧	外面：橙色	粘質的な突帯
14	不明	底部	1/12	表採	11.3	底径約32	ヨコハケ	ほぼ摩滅 一部指頭圧	外面：にぶい褐色 内面：褐色	
15	不明	底部	1/12	流土(11層)	16.8	底径約35	ほぼ摩滅 一部タテハケ	ほぼ摩滅 タテハケ、ナデ	外面：橙色 内面：橙色	
16	不明	突帯部	破片	流土(11層)	4.6	—	ほぼ摩滅 一部ヨコナデ	指頭圧	外面：橙色 内面：橙色	
17	蓋形	笠部中央 突帯	破片	流土(11層)	3.9	—	摩滅のため不明	ほぼ摩滅 一部指頭圧？	外面：橙色 内面：明黄褐色	
18	蓋形	笠部中央 突帯	破片	流土(11層)	4.4	—	摩滅のため不明	指頭圧	外面：橙色 内面：橙色	赤彩の可能性あり
19	不明	—	破片	流土(11層)	3.1	—	縦刷	ほぼ摩滅 一部指頭圧	外面：橙色 内面：橙色	

Ⅵ. まとめ

今回の第９次調査を含めたこれまでの調査成果を踏まえて、造り出しに関して判明した事実を整理しておく。

１，造り出しの形状

（１）現況

造り出しの現況についてはⅣで既に述べたが、いまいちど現地の観察により認識できる特徴を整理すると以下のようになる。

・後円部造り出しは後円部東側に取りつく墳丘の突出部である。

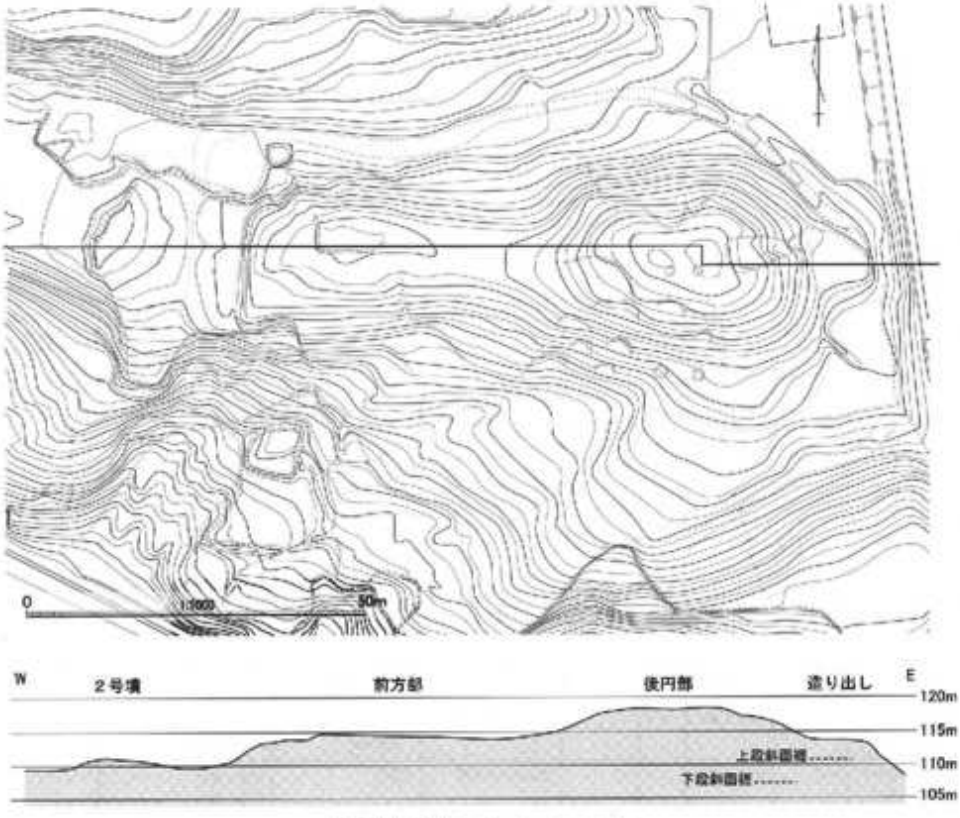
・造り出しは後世の改変による影響を受けており、本来の形状が損なわれている。

・現況から推定される造り出しの配置は、墳丘主軸より若干北東方向に偏している。

・造り出し上面の標高は現況で113.5m前後、前方部と後円部の鞍部の標高は現況で113.94mであり、南北方向からの側面観では造り出しと前方部の高さには大差ない。

（２）立面形

まず、立面形について詳しくみてみる。第15図は墳丘の現況をもとにしたエレベーション図で、南側から赤土山古墳を眺めたものである。これをみると、造り出し上面と前方部の標高はほぼ等しい。



第15図　墳丘エレベーション図

赤土山古墳は墳丘上の随所で地滑りが発生したため墳形の把握が難しくなっているが、これまでの調査の結果、後円部頂と前方部頂に関しては比較的旧状を保つと判断されている（松本(編)2003 Ⅳ章参照）。また、造り出しについては今回の第９次調査により地滑りの影響を受けていないことを確認している。このことから、前方部と造り出しの標高がほぼ等しいという現状は、古墳築造当時の状況をほぼ反映したものであるとみて大過ないであろう。一方で、造り出しの東側は急斜面を形成しており、後世の改変を受けていることは明らかである。築造当時には、造り出しはさらに東にのびていたと考えるのが適当と思われる。

ところで、既に触れているように、これまでの調査によって赤土山古墳は後円部・前方部ともに、上下２段築成であることがわかっている。第11調査区では地滑りの影響を受けていない下段斜面裾を確認しており、その標高は107.5m付近である。また、第13調査区・第15調査区では同じく地滑りの影響を受けていない上段斜面裾を、標高110～111m付近で確認している。したがって、上面が標高113mに達する造り出しは墳丘のなかでもかなり高い位置にあり、上段斜面に取りついていることがわかる。もともとは天理市櫛山古墳のように、後円部の両側に墳丘が取りつくような特異な形状を呈していたものと思われる。

造り出しは墳丘の低位に取りつくものが一般的であり、本例のように墳丘の高い位置に取りつくものは、一般的な造り出しとは異なる性格を有している可能性も考慮する必要があろう。

（３）平面形

平面形を復元する上では、これまでの調査により判明した墳丘裾の形状や埴輪配列が手がかりとなる。

第13調査区（第16図・第19図）　平成元年度・平成10年度に調査を実施した第13調査区では、上下２段築成の墳丘のうち、上段・下段斜面とその間の平坦面を確認している。第13－Ｃ調査区内で確認した上段斜面と平坦面の間の傾斜変換線は、後円部南側から北に向かって緩やかに円弧を描き、造り出し南側でほぼ屈曲して東に向かっている。

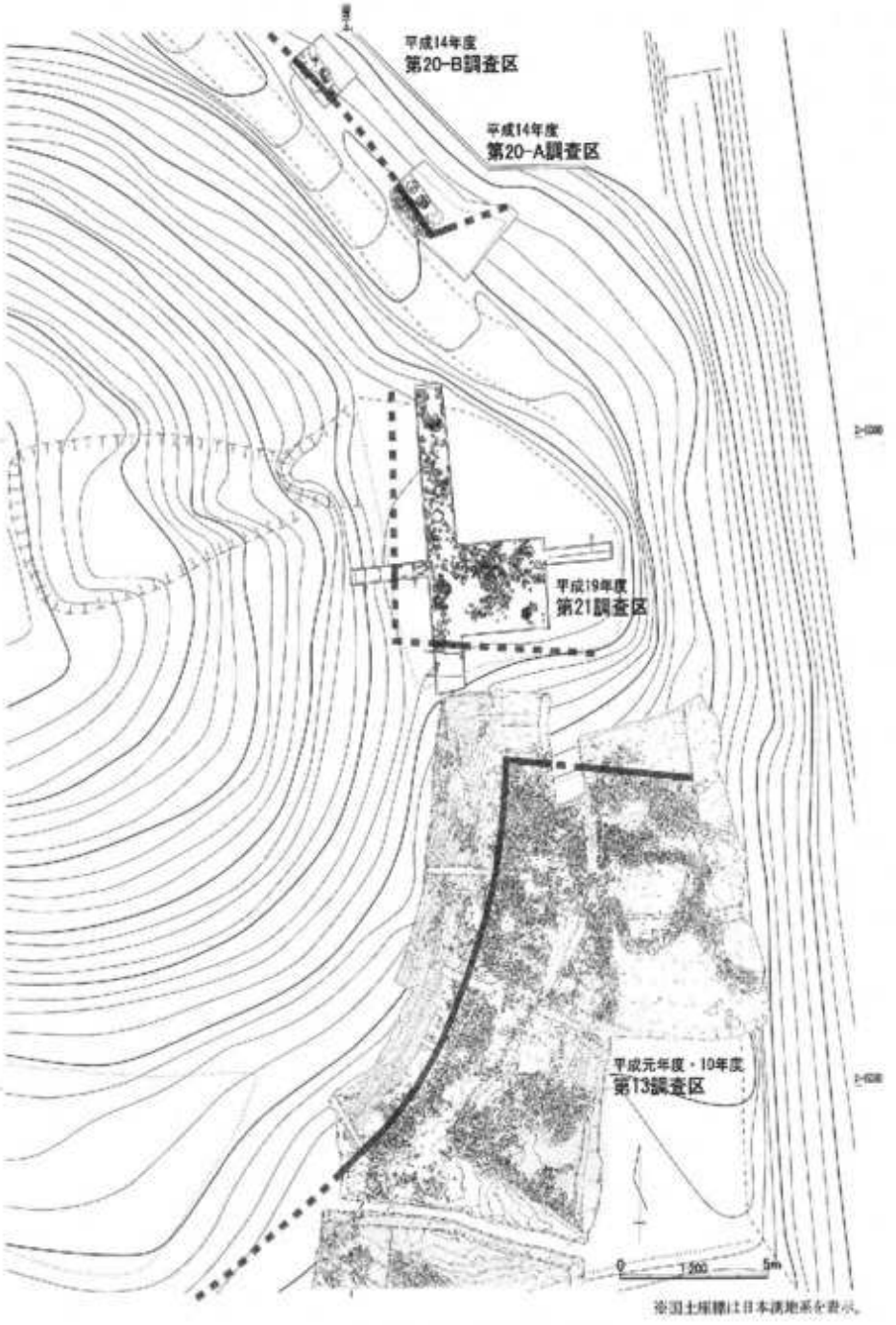
平坦面上では家形埴輪を中心とした遺構（家形埴輪祭祀遺構）、その周辺に円筒埴輪列が検出されている（埴輪列Ｅ・埴輪列Ｆ）。家形埴輪祭祀遺構の南側で検出された埴輪列Ｆは円筒埴輪が約50cm間隔で前述の傾斜変換線に沿って並ぶ。埴輪列Ｆよりさらに南西側は古墳築造後の地滑りによりかなり変位していたが（埴輪列Ｇ）、埴輪列Ｆそのものは地滑りの影響は受けず原位置を保つと判断されている。また、家形埴輪祭祀遺構の北側で検出された埴輪列Ｅは、円筒埴輪が約３ｍ間隔で傾斜変換線に沿う形で並んでいる。

このように上段斜面と平坦面の間に認められた傾斜変換線と埴輪列Ｅ・埴輪列Ｆの配列はよく対応しており、傾斜変換線を上段斜面裾とみても問題はないと思われる。

第20調査区（第16図）　平成14年度に調査を実施した第20調査区では、上段斜面の葺石と円筒埴輪が約60～70cm間隔で並ぶ円筒埴輪列が検出された（埴輪列Ａ）。第20－Ａ調査区・第20－Ｂ調査区では、上段斜面裾が北西から南東に向かい、埴輪列Ａもそれに平行して並んでいる。そして、第20－Ａ調査区内の埴輪列Ａが途切れる地点で、上段斜面裾を示すと思われる傾斜変換線が東に向かって屈曲している。ここでも上段斜面裾と埴輪列Ａの配列がよく対応している。

第21調査区（第７図、第16図）　既に述べたように、今回調査をおこなった第21調査区では、造り出し上面において上段斜面裾と円筒埴輪列（埴輪列Ｌ）を検出した。

上段斜面裾は西トレンチ内の１ヶ所で確認したのみであるが、埴輪列Ｌ１～Ｌ３のラインに沿っているものと思われる。造り出し上面と南側斜面の境については、南トレンチ内で確認した傾斜変換線が、現在の造り出し上面と南側斜面の傾斜変換線の位置とほぼ対応しており、現在の形状が旧状を比



第16図　造り出し周辺の調査

較的よく残していることを示唆する。さらに注目すべきは、造り出し上面の埴輪Ｌ３～Ｌ４のラインと、南側裾に並ぶ埴輪列Ｅ50～Ｅ52のラインはほぼ平行していることで、造り出し上面の南端ラインと斜面裾が平行していることを示すものとみられる。また、埴輪Ｌ１－Ｌ３－Ｌ４のなす角が100度程度を測ることも、造り出しの平面形を復元する上で重要な手がかりである。

平面形の復元　以上を踏まえて造り出しの平面形を復元すると第16図に示すようになるだろう。造り出しは後円部東側の上段斜面に取りつき、東側に向かってハの字に開く形状を呈する。造り出し南側斜面は後円部と同じく二段築成で、平坦面は後円部と共有している。下段斜面については家形埴輪祭祀遺構付近（第13調査区）と同様に、上段斜面に比べて低平なものであった可能性がある。一方造り出し北側斜面は削平の影響を受けているためよくわからないが、後円部から造り出し北側への屈曲点（第20調査区）の状況をみる限り、造り出し南側斜面と同様の上下２段築成であったと思われる。なお、想定している墳丘主軸はほぼ東西方向であるが、造り出しの位置は若干北に偏しており、造り出しの南側縁が主軸にほぼ平行するようである（第18図）。

２，普通円筒埴輪の大型品・小型品

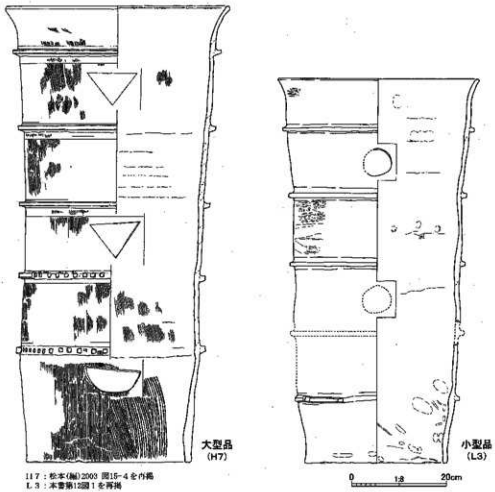
今回の第９次調査は、造り出しの形状に関する情報とともに、埴輪に関しても重要な資料を提供した。造り出し上面の埴輪列Ｌから全形がほぼ判明する普通円筒埴輪の資料が得られたことを踏まえて、これまでに得られた知見を整理しておく。

（１）大型品・小型品

赤土山古墳の普通円筒埴輪が大きさにより大別できることはこれまでの調査で既に明らかになっていたが、大型品は全形が判明しているのに対し、小型品は全形を知る手がかりが得られていなかった（松本(編)2003 Ⅲ章参照）。今回の第９次調査で良好な資料が得られたことにより、小型品についても全形を復元することができるようになった（第17図）。

大型品　大型品は埴輪列Ｈから全形の判明する資料が出土している。それによると、器高100cm前後、５条６段構成で、突帯間隔16cm前後、底部高25cm、底部径36～44cmを測る。底部には２方向に半円形透を有している。２段目より上は透かし孔にバリエーションがあり、方形透かし孔を互い違いにあけるもの、円形透かし孔をあけるもの、三角形透かし孔をあけるものが見られる。突帯の剥離部分には方形指突が観察できる個体が目立つ。色調は赤褐色のものが主体である。

小型品　小型品については、４段目まで残存する埴輪Ｅ50（第13調査区）がこれまで最も良好な資料であり、口縁部まで残るものが無かった。しかし、第９次調査において埴輪Ｌ３（第12図１）が出土したことにより全形を復元することができた。Ｌ３は底部・２段目と上段部分（３段分）が分離した状態で出土した。接合関係はないが残存部分の形状からみて４条５段にはなり得ず、５条６段構成となることは明らかである。復元される器高は81.8cmであり、突帯間隔14cm前後、底部高14cm、底部径30.3cmを測る（これまでの調査では底部高21cmを測る個体（埴輪列Ｄの一部）も出土しているが、例外的な存在である）。透かし孔は円形に限られるが、底部には透かし孔はない。２段目の透かし孔の有無によりさらに細分が可能である。また、大型品とは異なり、基本的に方形刺突はみられない。さらに、色調は橙色が主体であるという点でも、赤褐色が多かった大型品と異なる傾向を示している。



H７：松本(編)2003 図15-４を作図
Ｌ３：本書第12図１を再掲

第17図　普通円筒埴輪の大型品・小型品

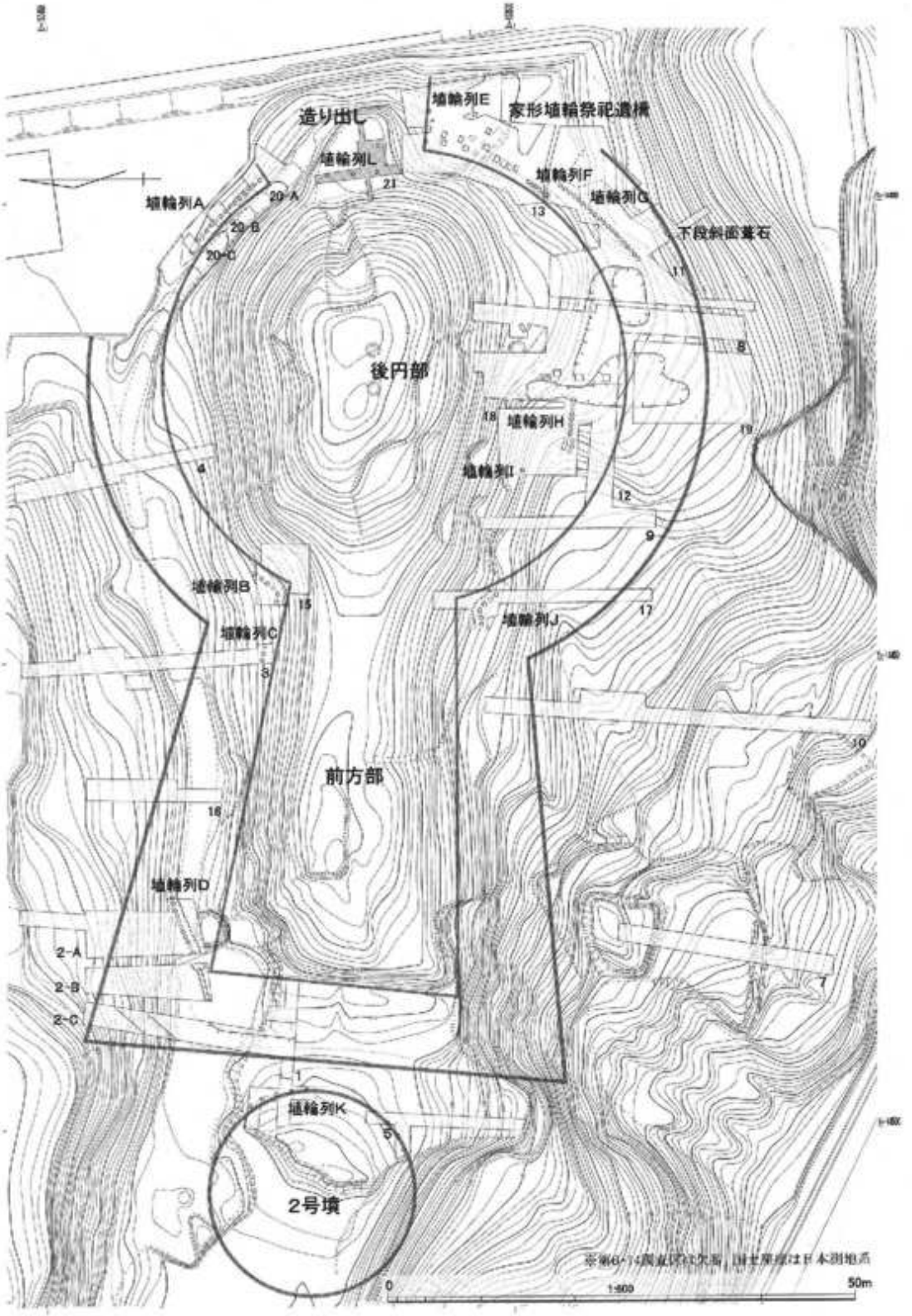
（２）大型品・小型品の使い分け

これら普通円筒埴輪の大型品・小型品は、樹立場所にあわせて使い分けられていた（第18図）。

大型品は北側くびれ部の埴輪列Ｂ、南側くびれ部の埴輪列Ｊ、さらには埴輪列Ｈから出土している。このうち埴輪列Ｈは築造時に後円部墳頂にあった埴輪列が、墳丘築造後の地滑りにより斜面中腹まで移動したものである。赤土山２号墳の埴輪列Ｋにも大型品が使用されている。なお、朝顔形埴輪が樹立される場所も普通円筒埴輪の大型品と基本的に共通しており、埴輪列Ｂ・Ｊ・Ｈ・Ｉから出土している。

一方、小型品は前方部北側の埴輪列Ｃ・Ｄ、後円部北側の埴輪列Ａ、後円部南側の埴輪列Ｆ・Ｇ、造り出し南側の埴輪列Ｅ、造り出し上面の埴輪列Ｌから出土している。このうち、埴輪列Ｅ・Ｆ・Ｇには、普通円筒埴輪の上に壺形埴輪をのせた状態で樹立されていたと考えられている個体がある（松本(編)2003 Ⅳ章）。

全面調査をおこなっていないので確定的なことはいえないが、これまでのトレンチ調査で得られた知見に従えば、後円部頂および南北のくびれ部付近には大型品が使用され、それ以外の前方部、後円部、造り出し周辺には小型品が並べられていた、とまとめることができるだろう。そして、大型品は朝顔形埴輪とともに埴輪列を構成し、小型品の埴輪列には朝顔形埴輪に代わって壺形埴輪を併用するという使い分けがなされていたと考えられるのである。



第18図　赤土山古墳の調査成果

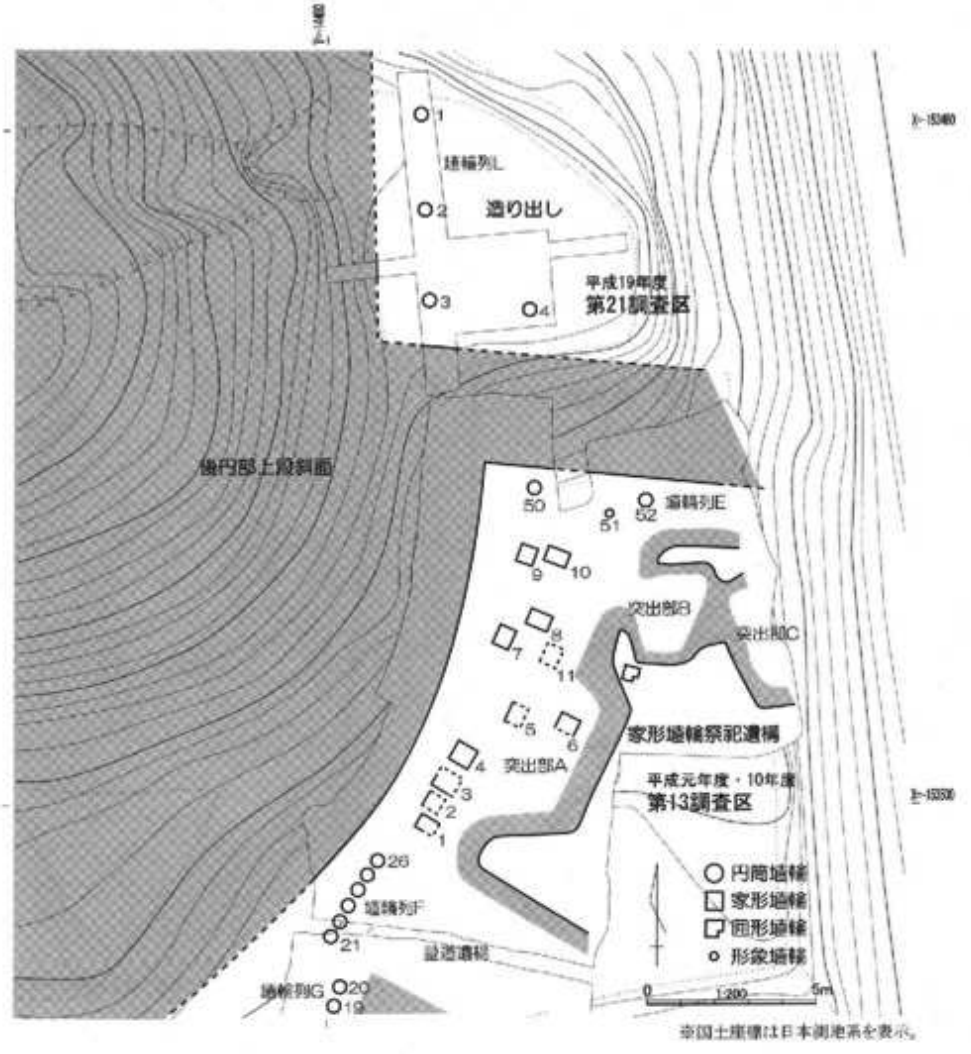
３．造り出しの埴輪配置

最後に、造り出しの埴輪配置の特徴について周辺の調査成果を含めて確認する。

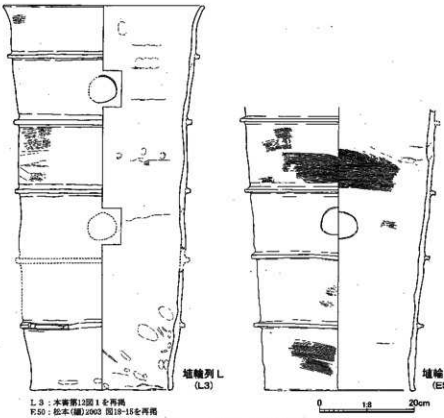
（１）普通円筒埴輪の配置（第19図）

既に述べているように、造り出し上面で検出した埴輪列Ｌは、造り出しの形状に沿って並べられていること、樹立間隔が約2.8～3.0ｍと広いことが特徴である。特に、埴輪列Ｌと南側上段斜面裾の埴輪列Ｅの樹立間隔がほぼ同じであることは注目される。墳丘全体の調査成果をみても、円筒埴輪の樹立間隔が３ｍにもおよぶのはこの２ヶ所だけの特徴である。造り出し北側の埴輪列Ａや家形埴輪祭祀遺構南側の埴輪列Ｆがいずれも標準的な間隔であることを考えると、造り出しの特殊性が目立つ。

さらに、埴輪列Ｌと埴輪列Ｅでは、樹立されている円筒埴輪の規格も共有されている（第20図）。いずれも小型品が使われており、２段目まで透かし孔をあけないという点も共通している。布掘ではなく、１基ずつ樹立されている点も同様である。造り出し上面の埴輪列Ｌと斜面裾の埴輪列Ｅが共通の



第19図　造り出し周辺の埴輪配列



第20図　埴輪列Ｌと埴輪列Ｅ

規格と樹立間隔を有することは、両者を含む造り出しという空間が一体的に捉えられていたことを示唆するものといえるだろう。

ただし、既に述べたように、斜面裾の埴輪列Ｅは内部の埋土から壺形埴輪の底部が出土しており、古墳築造当時には壺形埴輪を上にのせた状態で樹立されていたと考えられている。しかし、造り出し上面の埴輪列Ｌでは壺形埴輪をのせていた痕跡は確認されていない。このように、壺形埴輪の併用という点では造り出しの周辺でも差異が生じていた可能性があり、複雑な配置原理が働いていたことが窺われる。

（２）土坑出土の埴輪

第21調査区の中央付近で検出した土坑内からは、二重口縁形をもつ埴輪片などが出土した（第13図）。既に出土遺物の記述のなかでも触れたように、これらの埴輪は朝顔形埴輪としては従来の赤土山古墳出土例に比べてかなり小振りであり、肩部の突帯の位置など形態上の特徴も異なるという点に注意が必要である。

これらの埴輪が朝顔形埴輪ではないと仮定すると、壺形埴輪や蓋形埴輪の可能性が考えられる。ただし、壺形埴輪は造り出し南側斜面裾で出土しているが、口縁部など形状は一致しない。一方、造り出し上面では流土内から蓋形埴輪の破片（第14図17、18）などが出土していることから、これらの埴輪が蓋形埴輪の一部を構成していた可能性もあるが、いずれとも決めがたい。

この土坑の性格も問題となるが、現状では攪乱によるものとみている。もともと造り出しに存在した埴輪の一部が攪乱行為により土坑内に入った可能性を想定しておきたい。

Ⅶ. おわりに

今回の第９次調査は、造り出し上面の遺構の状況を確認することを目的とした最小限の調査であった。調査面積が限定されたため造り出し上面の全容を解明するには至らなかった。しかし、造り出しが地滑りの影響を受けていないことが確認され、おおよその形状を判断する材料が得られたことによって、墳丘の復元をおこなう手がかりとなった。なかでも、造り出しが墳丘の高い位置に取りついていることが明確になったことで、赤土山古墳の造り出しの特質が浮き彫りになったといえよう。通有の古墳の造り出しとは異なる性格を有している可能性を考慮しなければならないだろう。また、造り出しの埴輪とその配列がある程度判明したことで、これまでの調査成果とあわせて、赤土山古墳の外部施設に関する情報が一応は出揃ったといえる。とはいえ、東大寺山古墳群のなかでの赤土山古墳の時期的位置付けなど、今後の検討を通じて追究していくべき課題は多く残されている。

第９次調査をもって赤土山古墳の史跡整備事業に伴う一連の調査は完了した。今回の調査によって得られた知見は、現在継続している整備事業にも反映される予定である。

（石田大輔）

〔参考文献〕

鐘方正樹 2003 「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第４号 埴輪検討会

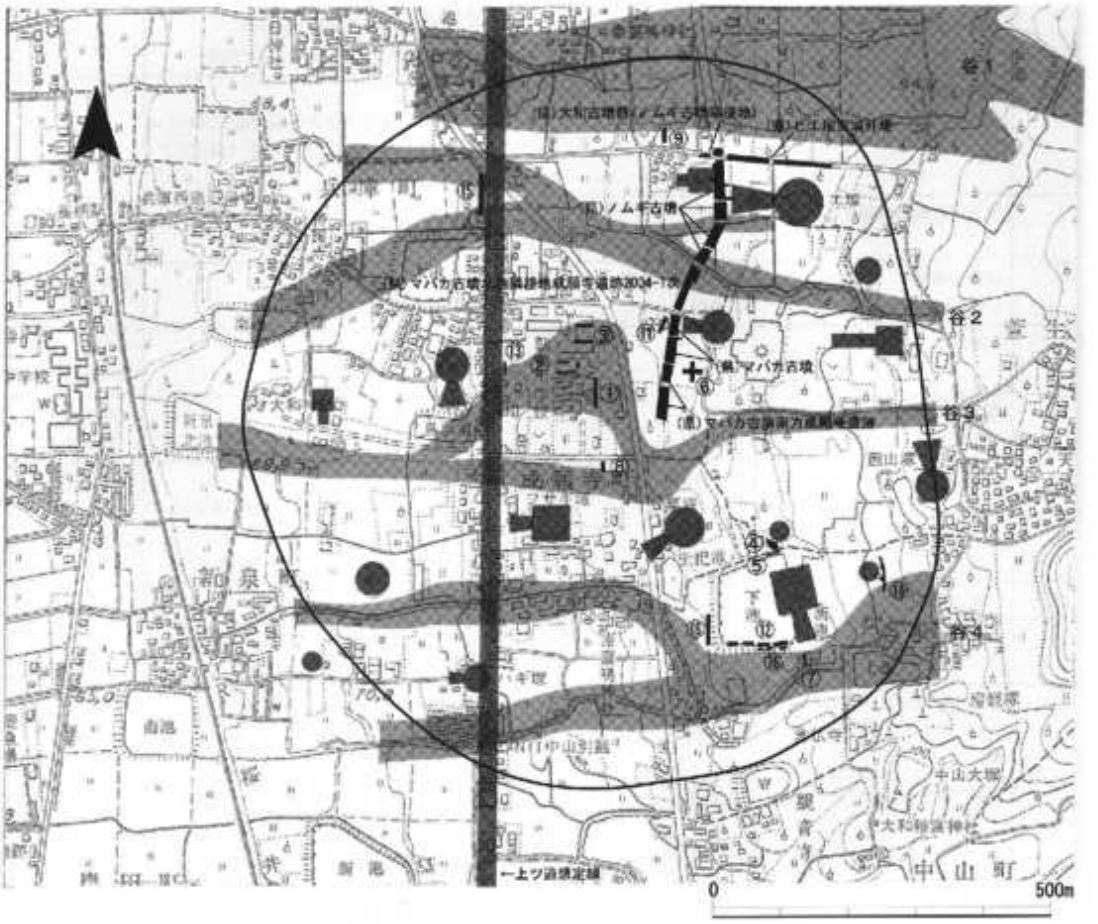
川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第２号

松本洋明(編) 2003 『史跡赤土山古墳 第４次～第８次発掘調査概要報告書』天理市教育委員会

成願寺遺跡（第15次）

Ⅰ．はじめに

成願寺遺跡は天理市成願寺町を中心に市域南部の山麓一帯に展開する、弥生時代から古墳時代にかけての遺物散布地であり、遺跡内には大和(萱生)古墳群の大半が所在する。また、遺跡を南北に縦断して、古代の官道である上ツ道が通過すると想定されており、調査地付近では近世上街道とほぼ重複する。今回の調査は、成願寺遺跡の範囲確認と上ツ道関連遺構の確認を目的として実施した。調査地は近世上街道に面し、佐保庄集落と成願寺集落のほぼ中間にあたる畑地(天理市兵庫町101番地1・2・3、第21図⑬)で、成願寺遺跡の北西隅付近に位置する。南北23m・東西３mの南北トレンチの南端に南北３m・東西3.5mの張り出し部を西向きに設定し、重機により表土･耕作土を除去後、人力掘削に移行した。調査中にトレンチを北へ９m拡張したため、最終的な調査面積は106.5㎡である。調査は平成20年３月３日より開始し、同年３月24日に全ての作業を終了した。遺構の実測等に際しては、日本測地系による国土座標を使用した。



第21図　成願寺遺跡調査区分布・地形復元図（1/10000）

Ⅱ．既往の調査

成願寺遺跡では、これまでに天理市16ヶ所、奈良県６ヶ所の本調査が実施されている。その概略を第７表･第８表に、各調査区の位置を第21図に示す（試掘調査は除外）。なお、天理市教育委員会の調査については、これまで調査名が任意に付けられていたため、今回の報告で古墳墳丘部以外の調査を成願寺遺跡の調査として、過去に遡って次数を付した。

第７表　天理市教育委員会による調査

次数	旧称	遺構	遺物	文献
1	成願寺遺跡第１次	溝状遺構 谷地形	弥生土器・土師器・須恵器	泉1985a
2	成願寺遺跡第２次	砂層	なし	泉1985b
3-1	成願寺遺跡第３次	砂層	なし	泉1988
3-2	成願寺遺跡第３次	砂層	なし	泉1988
4	成願寺遺跡 （西ノ山地点）	柱穴・池状遺構 西ノ山古墳周庸・葺石・外堤 包含層	土師質土器・磁器(15C) 須恵器(５Ｃ後葉)･弥生上器(中期初頭･後期前半)･瓦器(12C前半)･凸基有茎式石鏃	青木1991
5	下池山古墳北側外堤	下池山古墳外堤 溝状遺構･石組集水施設 包含層	土師質土器･陶器(中近世) 弥生土器(後期)･埴輪(古墳後期)	青木1993
6	大和古墳群 （クリヤダ地区）	旧地形(マバカ古墳細割外郭？) 包含層	土師器(庄内～布留)･須恵器(古墳後～終末･平安後)･黒色土器･土釜(平安後)	松本1992
7	下池山古墳隣接地	谷地形	陶器･土師質土器･瓦質土器･須恵器･漆塗木椀（中世～近世後期）	泉2003
8	成願寺遺跡 （大和古墳群）	自然流路 基盤層	庄内式土器 縄文土器(晩期中葉～終末)	松本1997
9	成願寺遺跡	なし	土器(中世)	未報告（平成12年度調査）
10	黒塚古墳隣接地	なし	なし	未報告（平成12年度調査）
11	大和古墳群･成願寺遺跡	耕作痕跡 七杭 埋没古墳 包含層	土器(平安期) 土器(弥生後期後半～古墳前期初頭) 土器･埴輪(布留古相後半) 土器(弥生後期後半～古墳前期初頭)	青木2005
12	成願寺遺跡	なし	なし	松本2004
13	成願寺遺跡	大溝 自然流路	土器(庄内式後半～布留式初頭) 縄文上器(後期末～晩期)	未報告（平成17年度調査）
14	成願寺遺跡･ホックリ塚古墳	包含層 谷地形	土器(弥生中期末～古墳前期) 須恵器（東播系含む）・瓦器･土師質 土器･瓦質土器(中世)	未報告（平成18年度調査）
15	成願寺遺跡第15次	自然流路 耕作痕跡	縄文土器(中期末～後期初頭)･土師器･須恵器(古墳前期～中期末) 私鋳銭	本書
16	成願寺遺跡第16次	護岸石組	陶磁器･瓦(近世後半以降)	未報告（平成20年度調査）

Ⅲ．調査の概要

1．層序（第22図）

Ⅰ層は造成土である。上半がにぶい黄橙色砂質土、下半が灰色シルトであり、特に下層には現代ゴミを多く含む。地権者からの聞き取りでは、調査地は昭和35年前後まで県道天理桜井線（現・国道169号線）の道路用地であり、現道への道路移設後に盛土して畑地化したといい、Ⅰ層上半が盛土層、Ⅰ層下半は道路移設後、畑地化するまでに形成された土層として捉えられる。厚さは合計70～100cmである。Ⅱ層は緑灰色系のシルト質土からなる耕作土で、県道敷設以前に耕作地であった状況を示す。厚さは40～60cmである。Ⅱ層を除去すると、調査区全面が灰色系ないし褐色系の砂層・砂礫層（Ⅲ層）で覆われており、上面で正南北方向に走る中世段階の素掘溝を検出した。Ⅲ層は河川に伴う堆積であり、徐々に掘り下げていくと北側で黒色粘土、南側で黄橙ないし青灰色系の微砂～砂質シルトからなるⅣ層が現れ、その上面で自然河川２条を検出した。Ⅳ層以下では遺構・遺物ともに検出され、Ⅳ層を地山として捉えることができる。

第８表　奈良県立橿原考古学研究所による調査

地点名	遺構	遺物	文献
大和古墳群（ノムギ古墳隣接地）	ノムギ古墳周盛	埴輪（古墳前期後半）・土師器・須恵器（古墳）・木製品	岡林1997
ヒエ塚古墳外堤	ピット・溝 石垣・素掘小溝・落ち込み 溝 古墳周濠外堤 土坑	須恵器・瓦器（中世） 青磁・黒色土器・磁器・瓦器（近世～現代） 土器（弥生後期～古墳前期初頭） 板材・杭	坂・鈴木編2007
マバカ古墳前方部西側	列石・バラス敷き 盛状区画 十坑 井戸 素掘溝 暗渠	土器（庄内～布留初頭）・須恵器・黒色土器・土師質羽釜 瓦質土器（中世後半）・板材・杭 黒色土器（10世紀後半）・土師器・曲物 土師器・黒色土器・瓦器（中世） 陶器・瓦（近世）	坂・鈴木編2007
マバカ古墳南方　成願寺遺跡	周溝状遺構・溝 井戸 素掘溝	土器（庄内・東海系8字壺など） 瓦器（13世紀後半）・弥生土器 土師質土器・瓦器（中世後半）	坂・鈴木編2007
ノムギ古墳	ノムギ古墳周盛 ノムギ古墳墳丘 包含層（古墳築造時地表） 落ち込み 鉢状カット 井戸 溝 ピット 素掘溝 土坑 谷	縄文土器（後期中葉）・弥生土器（前～中期）・古式土師器（古墳前期前半）須恵器（古墳後期）・埴輪（古墳前期後半・中期後半） 土師器（飛鳥）・黒色土器・瓦・サヌカイト石鏃・鉄製品 弥生土器（前期）・石鏃・サヌカイト 古式土師器 土師器 黒色土器・七師器椀（9世紀末）・曲物 須恵器（古墳中～後期）・埴輪（古墳前期後半・中期） 黒色土器（9世紀末） 黒色土器（10世紀後半）・瓦器椀（13世紀後半）・須恵器・土師器（古墳） 須恵器（古墳後期～飛鳥）・土師器（飛鳥） 土器（古代末）	近江編2006
マバカ古墳北西隣接地　成願寺2004-1次	盛状区画 川跡 土坑 井戸 素掘溝	弥生土器（中期以降）・土師器片・須恵器片・土玉・石器類 古式土師器（庄内併行～布留初頭）・埴輪（古墳前期中葉・中期後半）・須恵器（古墳中期末～奈良）・木製梯子・泥除・杭・石杵・鋸石・黒色土器・土師質土器（平安） 土師器（中世？） 黒色土器・瓦器・土師器・須恵器・埴輪	坂・鈴木編2007

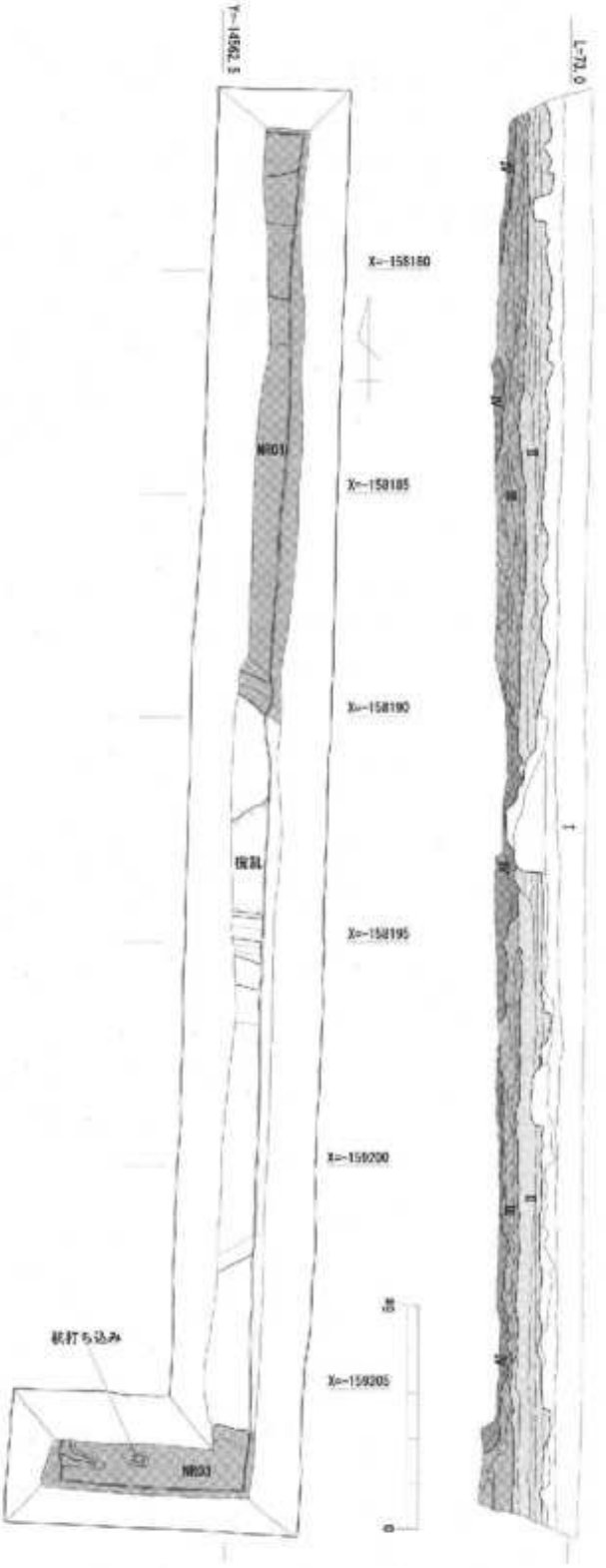
2. 主要な遺構（第22図）

古墳時代の自然河川２条を確認した。いずれもほぼ東西方向に流れるものと思われる。

NR01　調査区北半で検出した自然流路である。南肩は明瞭であるが、北肩は不明瞭で、調査区外に広がると思われる。掘削作業の安全確保のため、一部を除き川底の検出を断念した。幅13m以上、検出面からの深さ50cm以上を測る。

南側では上層で灰黄色系の砂礫層と灰白色系の微砂層が場所によって互層をなし、下層は灰白色系の細砂層、ないし地山の黒色粘質土を含む灰～暗灰色系の微砂層となる。また南肩部には褐灰色シルト層の堆積が見られる。

北側では上層が灰～褐灰色系の粗砂層、下層が灰～緑灰色系の砂～微砂層となる。調査最終段階で北端部に深掘りを行ったところ、Ⅳ層の黒色粘土層が厚さ30cm前後であり、その下に灰白色粗砂層（厚さ20cm前後）、黒色粘土層（厚さ80cm以上）と続き、いずれも無遺物層であった。なお、安全確保の関係でNR01肩部のⅣ層とトレンチ北端部のⅣ層とは壁面でつながりを追えておらず、土色・土質のみで同一層と判断しているため、深掘りで検出した黒色粘土層が地山（Ⅳ層）となる可能性も残されている。深掘り部分は湧水が激しく、掘削後数分と経たずに壁面が崩壊する状況であったため、写真による記録にとどめた。



第22図　遺構配置図及び土層断面図（1/150）

NR03　調査区南端で検出した自然流路である。北肩のみ検出しており、南肩は調査区外である。幅1.8m以上、検出面からの深さ80cm以上を測る。掘削作業の安全確保のため、川底の検出は断念した。

最上層に拳大～人頭大の礫を含む褐色砂礫層が最大40cmほどの厚さで堆積し、肩部では灰黄褐色系の細砂～粗砂層となる。砂礫層の下は灰黄色系の細砂層、暗灰色粘土層、暗青灰色粗砂層となり、砂層と粘土層が互層をなす。調査最終段階で南端部に重機による深掘りを行ったところ、トレンチ床面から10cmほどで黒色粘土層が現れ、その厚さは40cm以上であった。深掘り部分は湧水が激しく、掘削後数分と経たずに壁面が崩壊する状況であったため、写真による記録にとどめた。

流路の北側には、流路に伴う淀みないし溢れ堆積と思われる落ち込みが存在する。落ち込みは幅約10m、検出面からの最大深さ約50cmを測る。上半部に褐灰色系、下半部に灰黄褐色系の砂層が堆積し、北肩部には黒褐色シルト層の堆積が見られる。

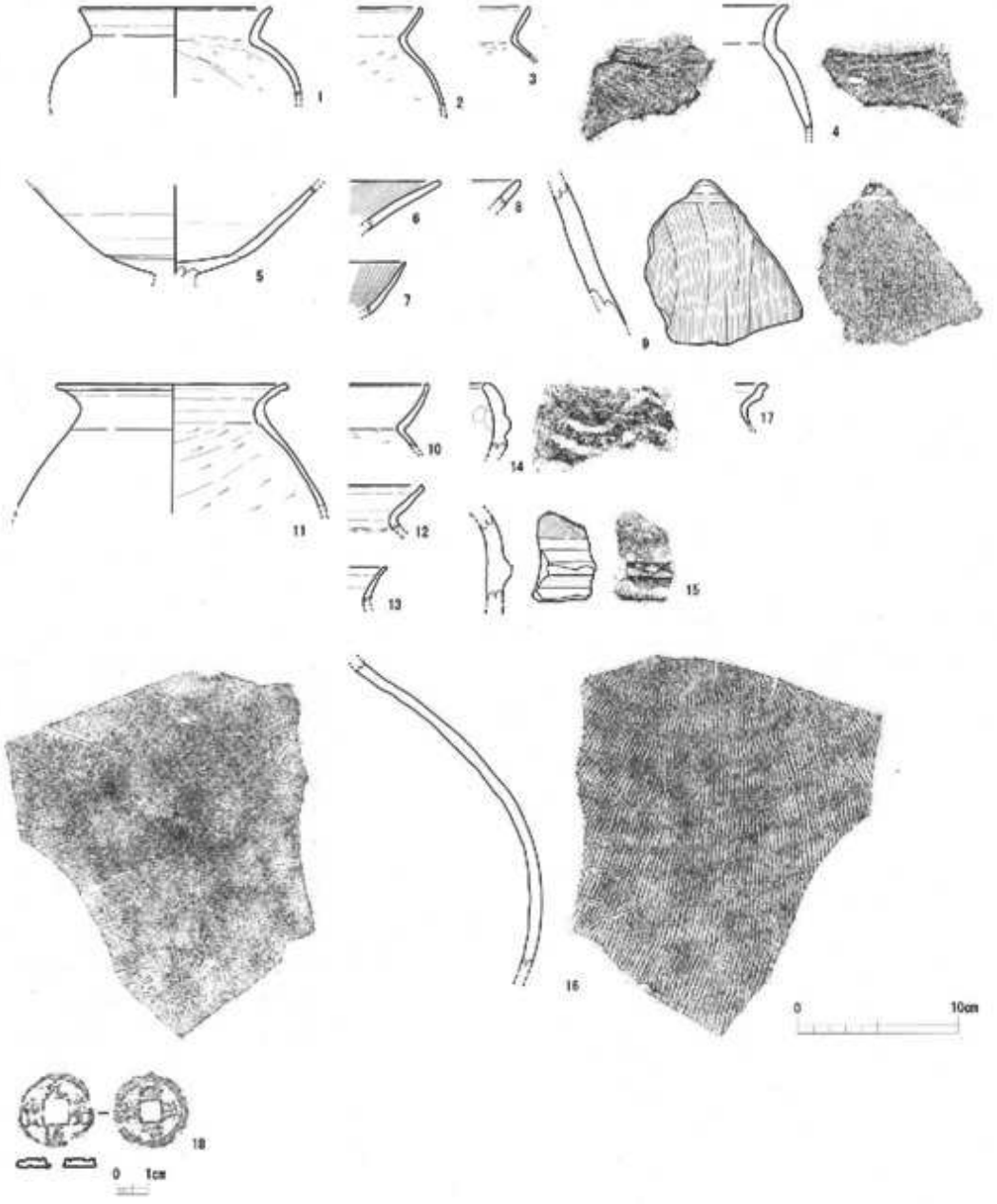
なお、流路内に打ち込まれた杭１本を検出したが、杭列になるような状況や横木の設置は確認できなかった。

Ⅳ．出土遺物

NR01出土遺物（第23図１～９）　縄文土器片および古墳時代前期に属する土師器片が出土し、このうち土師器９点を図化し得た。１は短頸壺の上半部である。口縁部はやや外反し、胴部は球形を呈する。口縁部外面・胴部内面に混和材の圧痕がみられる。胎土に長径６mm以下の石英粒を少量含む。２は甕の口縁部～胴部上半片である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。胴部は球形を呈し、胎土に石英・長石・雲母の粒を少量含む。３は甕の口縁部～頸部片である。口縁部はやや内湾して立ち上がり、外端面に凹線を１条施す。胎土は微細な石英・雲母粒を含む。外面に黒色の付着物が見られる。４は弥生後期型甕の口縁部～胴部上半片である。口縁部は強く外反し、端部は丸くおさまる。胴部はなで肩状を呈し、器壁は全体にやや厚手である。胎土は長軸５mm以下の石英粒をわずかに含み、内面に混和材の圧痕が見られる。５は高坏の坏部下半である。坏部はほぼ直線的に開き、坏底部と口縁部の境目に沈線による稜をつくる。胎土は微細な長石・雲母粒をわずかに含み、内面に米の籾圧痕がみられる。６は広口壺の口縁部片か。わずかに外反し、端部は丸くおさまる。内面側の口縁部端が黒化する。胎土は微細な石英・雲母粒を少量含む。７は高坏の口縁部片か。内湾して立ち上がり、端部はわずかに外反する。胎土には砂粒をほとんど含まない。８は壺の口縁部片である。直線的に立ち上がり、器壁は厚手で端部は丸くおさまる。胎土は長径1.5mm以下の長石粒を少量含む。９は壺の頸部～胴部上半片か。傾きの分かる部分がないため、断面図の傾きは任意で図示した。内湾がほとんど見られず、器壁も厚いことから相当大型の土器であることが分かる。胎土は長径３mm以下の長石・石英粒を多く含む。

NR03出土遺物（第23図10～16）　縄文土器片、古墳時代前期および中期後半～末に属する土師器片・須恵器片が出土し、このうち縄文土器片１点・須恵器片１点・土師器片４点・埴輪片１点を図化し得た。10は北側の溢れ堆積中から出土した甕口縁部～頸部片である。口縁部は内湾し、口縁端部は内側に肥厚する。胎土は長径１mm以下の長石・石英粒を多く含む。11は砂礫層から出土した甕口縁部～胴部上半片である。口縁部は外反し、端部は外側にやや肥厚する。胴部はなで肩状を呈し、外面は煤が厚く付着する。胴部内面は右上がりのケズリが顕著で、口縁部に比べ器壁が薄い。胎土中に石英粒・雲母

を多く含む。古墳時代前期前半に遡ると思われる。12は北肩部から出土した甕頸部片である。口縁部はわずかに内湾し、端部は内側に肥厚する。胎土は長径1.5mm以下の石英・雲母粒を多く含む。13は暗灰色粘土中から出土した甕の口縁部片である。外反気味に立ち上がり、口縁部の肥厚は見られない。胎土には微細な雲母粒をわずかに含む。14は暗灰色粘土中から出土した縄文土器鉢の口縁部片である。内湾する口縁部付近に、竹管状工具による２条の波状沈線を施す。地文となる縄文は、器表面が摩滅しているために残存していない。胎土は長径６mm以下の石英・長石粒を非常に多く含む。いわゆる縁帯文系土器と思われ、時期は縄文時代中期末～後期初頭頃と考えられる。15は北肩部から出土した朝



第23図　出土遺物実測図及び拓本（１～17はS＝1/4、18は1/2）

頸形埴輪の肩部片である。幅2.4cm・高さ0.6cmの断面台形の凸帯を持ち、凸帯上半は大きく欠損する。焼成は須恵質で、胎土は長径３mm以下の長石粒を多く含む。16は暗灰色粘土中から出土した須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ後に沈線を施して、韓式系の影響が認められる。胎土は長径２mm以下の長石・石英粒を少量含む。図示したもののほか同一個体と思われる破片が３点あったが、接合関係はない。

第９表　出土遺物観察表

番号	器種	色調	胎土	焼成	法量	残存率（口縁）	出土地点	備考
1	壺	10YR7/2にぶい黄橙	密	良好	復元口径12.0cm 現存高5.6cm	1/4	NR01	口縁部ヨコナデ 胴部内面ヘラケズリ
2	甕	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	現存高6.0cm	破片	NR01	口縁部ヨコナデ 胴部外面左上がりハケ 胴部内面ヘラケズリ
3	甕	10YR6/2灰黄	密	良好	現存高3.2cm	1/10	NR01	口縁部ヨコナデ 胴部外面右上がりハケ 胴部内面右上がりケズリ
4	甕	7.5YR8/2灰白	密	良好	現存高8.0cm	破片	NR01	口縁部ヨコナデ 胴部外面平行タタキ 胴部内面不定方向板ナデ
5	高坏	5YR7/4にぶい橙	密	良好	現存高5.2cm	—	NR01	内外面ヨコナデ
6	壺？	10YR7/3にぶい黄橙	密	良好	現存高3.2cm	破片	NR01	内外面ヘラミガキ
7	高坏？	5YR6/4にぶい橙	密	良好	現存高3.4cm	1/10	NR01	外面調整不明 内面ヨコナデ後ヘラミガキ
8	壺	7.5YR6/4にぶい橙	密	良好	現存高1.8cm	破片	NR01	内外面ヨコナデ
9	壺	10YR7/2にぶい黄橙	やや密	良好	現存長10.3cm	—	NR01	外面タテハケ 内面調整不明
10	甕	7.5YR7/4にぶい橙	やや粗	やや良好	現存高4.0cm	破片	NR01	口縁部内外面ナデ 胴部内面ヘラケズリ
11	甕	5YR8/4淡橙	やや粗	良好	復元口径14.4cm 現存高7.6cm	1/4	NR03	口縁部ヨコナデ 胴部内面ヘラケズリ
12	甕	10YR6/3にぶい黄橙	やや粗	良好	現存高2.8cm	破片	NR03	口縁部ヨコナデ 胴部内面ヘラケズリ
13	甕	7.5YR7/4にぶい橙	密	良好	現存高2.0cm	1/20	NR03	内外面ヨコナデ
14	鉢	10YR6/2灰黄褐	粗	やや軟	現存高4.2cm	破片	NR03	内面ユビオサエ
15	埴輪	5YR6/4にぶい橙	やや粗	良好	現存高5.5cm	—	NR03	外面左上がりハケ
16	甕	N6/0灰	密	良好	現存高18.8cm	—	NR03	外面平行タタキ後沈線 内面不定方向ナデ
17	甕	10YR8/1灰白	やや粗	やや良好	現存高2.4cm	破片	東細溝	内外面ヨコナデ
18	銭貨	5G7/1明緑灰	—	—	径2.4cm 厚0.2cm	完存	Ⅲ層上面	元豊通寶を元にした私鋳銭

これらの遺物は、縄文土器を除けば古墳時代前期および中期後半～末の時期に属する。

その他の遺物　Ⅱ層中及びⅢ層上面、素掘溝からは、土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・銭貨などが出土し、中近世以降に当地が耕地化されていたことが知られた。17は素掘溝に混入して出土した甕の口縁部片である。口縁部は強く内湾して受口状をなし、端部は外側に肥厚する。頸部下側の外面側には、装飾的に施された斜め方向の沈線があることから、いわゆる近江系受口状口縁甕の中でも湖東地域から搬入されたものであることが知られる。胎土は長径２㎜以下の石英粒を多く含む。18はⅢ層上面で検出した銅銭である。両面に「元豊通寶」の文字があり、Ａ面は草書体、Ｂ面は篆書体で、字の方向はＡ面とＢ面とで90度ずれている。また、B面側は鋳上がりが極端に悪く、「元」以外の文字はほとんど潰れている。以上の特徴から、この銅銭は北宋(960～1126)の元豊通寶(1078初鋳)を踏み返した私鋳銭と考えられる。

Ⅴ．まとめ

成願寺遺跡の地形復元案　既往の調査成果(第７表・第８表)および現状の自然流路・水路等の配置をもとに、古墳の立地する位置を尾根筋ないし微高地上と仮定して、成願寺遺跡の地形復元を試みた(第21図)。図中の灰色網掛け部分が谷筋の推定ラインである（谷１～谷４)。谷１は乙木・佐保庄遺跡における県道バイパス関連の試掘調査等で確認した谷地形をもとに、越川現流路等を考慮して復元した。谷２はノムギ古墳Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区・マバカ古墳北西隣接地および今回の調査地で確認した谷地形や自然流路をもとに、長柄川現流路等を考慮して復元した。谷３は１・２・３次調査で確認した砂堆積、８・13次調査・マバカ古墳南方の試掘調査で確認した谷地形の落ち込みをもとに、周辺の水路配置等を考慮して復元した。谷４は７・14次調査で確認した谷地形の落ち込みをもとに、新泉川の現流路等を考慮して復元した。いずれも断片的な情報に基づく一つの復元案であり、今後の調査の進展によって逐次修正されるべきものであるが、現時点ではこの復元案に従って、以下の記述を行う。

調査地と古墳前期集落域との関係　成願寺遺跡では、これまでに自然流路や古墳周濠、溝状遺構などが確認されているものの、弥生～古墳時代の明確な生活遺構はほとんど検出されていない。今回の調査においても、自然流路２条を確認するにとどまり、人為的遺構は川底に打ち込まれた杭１本のみであった。

調査地のすぐ南側には長柄川の現流路があり、今回検出した自然流路は長柄川に関わる可能性が高い。さらに、調査地より350ｍほど上流では、やはり現長柄川に面して県のノムギ古墳Ⅳ区およびマバカ古墳北西隣接地で谷地形や自然河道(川跡２)が検出されており、川跡２とNR03は、古式土師器と古墳時代中期後半～末の須恵器や埴輪を含む点において時期的に近接する。このことから、川跡２とNR03の間に密接な関連を想定することができる（谷２)。

なお、川跡２で古式土師器が多く出土したことから、報告担当者は同調査地近辺に「古墳造営にかかわる集団が居住する一般集落」の存在を想定する見解を示している(坂2007)。古式土師器の出土はヒエ塚古墳外堤上に掘られた溝やノムギ古墳の周濠、マバカ古墳南方で確認された周溝状遺構などでも確認されており、これらの古墳周辺部に古墳前期前半期の集落域を求めることには一定の妥当性が認められる。とすれば、調査地周辺は想定集落域の下流域にあたると考えることができよう。

一方で、NR01から出土した古墳時代前期末～中期初頭の土器は、成願寺遺跡の範囲内には類例が乏

しく、谷１の対岸に位置する乙木・佐保庄遺跡に少量ながら出土例がある。今回の地形復元案では現状の水路配置から、谷２から北へ分岐する谷筋としてNR01を位置づけたが、あるいは谷１との関連で捉えるべきであろうか。今後の検討課題としたい。

調査地と上ツ道との関係　調査地は成願寺遺跡の範囲であるとともに、古代の官道である上ツ道の想定線上にも位置している。今回の調査では上ツ道関連の遺構の確認が期待されたが、旧耕作土の直下で河川堆積の最上層となり、上面で中世の素掘溝を検出したものの、道路側溝になるような幅広の溝や道路敷設に伴う造成土等は確認できなかった。これが後世の耕作に伴う削平によるものか、道路敷自体が調査区外に存在したのかは、現段階では明らかにし得ない。

縄文土器について　NR01・NR03から、それぞれ一点ずつ縄文土器片の出土をみた。NR01のものはごく小さい破片であるため時期の特定が困難であるが、NR03出土のものは内湾する口縁部の外面に波状に沈線を施しており、縄文時代中期末～後期初頭に位置づけられるものである。成願寺遺跡の範囲内では、８次調査で晩期中葉および末、13次調査で後期末～晩期、ノムギ古墳Ⅰ区で後期中葉の土器片がそれぞれごく少量出土している。今回出土した縄文土器片は、成願寺遺跡の範囲内では最も古く位置づけられるものであり、ノムギ古墳Ⅰ区例と並んで、遺跡北半部で遅くとも縄文時代後期段階には何らかの生活活動が営まれていたことを示唆する。

私鋳銭について　素掘溝検出面に密着して、私鋳銭が出土した。私鋳銭は室町～戦国期の中世後期に流通した貨幣であり、成願寺遺跡の範囲内で近接する時期の遺構としては、４・５次調査で柱穴や池状遺構、溝状遺構、石組集水施設などがあって屋敷地と想定されているほか、ヒエ塚古墳外堤でピットや溝、マバカ古墳前方部西側で素掘溝や土坑が確認されている。現在までの調査成果からは、遺跡北半部は中世後期には耕作地帯となっていたことが考えられ、調査区内においても銭を扱うような施設の存在は確認されていない。こうした周囲の状況や、単独出土であること、また埋納施設も確認していないことから考えれば、偶然の遺失によって埋没したものと捉えてよいであろう。調査地の東隣には古代の上ツ道を踏襲する上街道が現在まで機能しており、想像をたくましくすれば、上街道の通行者が偶然落としていったものとも考えられよう。

（北口聡人）

＜参考文献＞

青木勘時1991「Ⅱ　西ノ山古墳・成願寺遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財調査概報』1990年度　天理市教育委員会

青木勘時1993「下池山古墳北側外堤」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成２・３年度（1990・1991年）天理市教育委員会

青木勘時2005「大和古墳群・成願寺遺跡の調査」『天理市埋蔵文化財調査概報』（平成14・15年度・国庫補助事業）天理市教育委員会

泉武1985a「２　成願寺遺跡（第１次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』天理市教育委員会

泉武1985b「２　成願寺遺跡（第２次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』天理市教育委員会

泉武1988「７　成願寺遺跡（第３次）」『天理市埋蔵文化財調査概報』昭和61・62年度　天理市教育委員会

泉武2003「８．下池山古墳隣接地（遺物散布地）」『天理市埋蔵文化財調査概報』平成８・９年度（1996・1997年）天理市教育委員会

近江俊秀編2006『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十三集　ノムギ古墳』奈良県立橿原考古学研究所

岡林孝作1997「大和古墳群（ノムギ古墳隣接地）」『奈良県遺跡調査概報1996年度　第１分冊』奈良県立橿原考古学研究所
坂靖・鈴木裕明編2007『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十九冊　マバカ古墳周辺の調査』奈良県立橿原考古学研究所
坂靖2007「第４篇　マバカ古墳周辺部　第Ⅲ章　小結」『奈良県立橿原考古学研究所調査報告第九十九冊　マバカ古墳周辺の調査』
松本洋明1992「大和古墳群（クリヤダ地区）」『天理市埋蔵文化財調査概報』（1991年度国庫補助）天理市教育委員会
松本洋明1997「成願寺遺跡（大和古墳群）」『天理市埋蔵文化財調査概報』（平成８年度・国庫補助調査）天理市教育委員会
松本洋明2004『成願寺遺跡－下池の護岸工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要－』天理市教育委員会

第 3 章

資 料 報 告

天理市萱生町地内出土の須恵器台付長頸壺

発見の経緯

平成19年7月18日14時ごろ、萱生町在住の市民より文化財課に、「宅地内で汚水桝設置工事中に壺が出土した」との電話連絡があった。汚水桝工事は下水道整備工事の一環として行われたもので、現地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかった。

連絡を受け、文化財課職員が現地に急行したところ、須恵器脚付長頸壺1点と、40～70cm角の石材5点が取り上げられているのを確認した。そこで、出土時の状況について発見者より聞き取り調査を実施した。

聞き取り調査の内容

現地一帯は土層中に大小の自然礫を多く含む地質であるが、現地工事においては現地表下100cmを過ぎたあたりから特に大型の礫が見られ、現地表下170cmまで掘り下げたところで須恵器が出土した。また、当該地点には約30年前まで「イモ穴(イモを貯蔵するための竪穴)」があり、その設置の際にも須恵器や大石が出土した。大石については人力で動かすことが困難であったため、出土時点での位置を動かさずに、穴へ降りていくための階段として利用した。イモ穴掘削の際に出土した須恵器は散逸して行方不明である。

工事写真の提供

翌日、本市下水道建設課に工事状況写真の提供を要請したところ、提供された数カットの写真の中に、須恵器の出土状況を偶然捉えたカットを確認した(第24図)。写真からは須恵器が大石の下敷きになり、地山から若干浮いた状態で出土しているように見える。

出土遺物について(第25図)

須恵器台付長頸壺である。現存高23.8cm、復元口径9.6cm、胴部最大径17.0cmを測り、台部の大半及び口縁部の1/2ほどを欠く。

頸部は長くラッパ状に開き、口縁にやや焼け歪みがみられる。シボリ成形後にロクロナデ調整を施し、胴部とは別に成形した後に接合している。

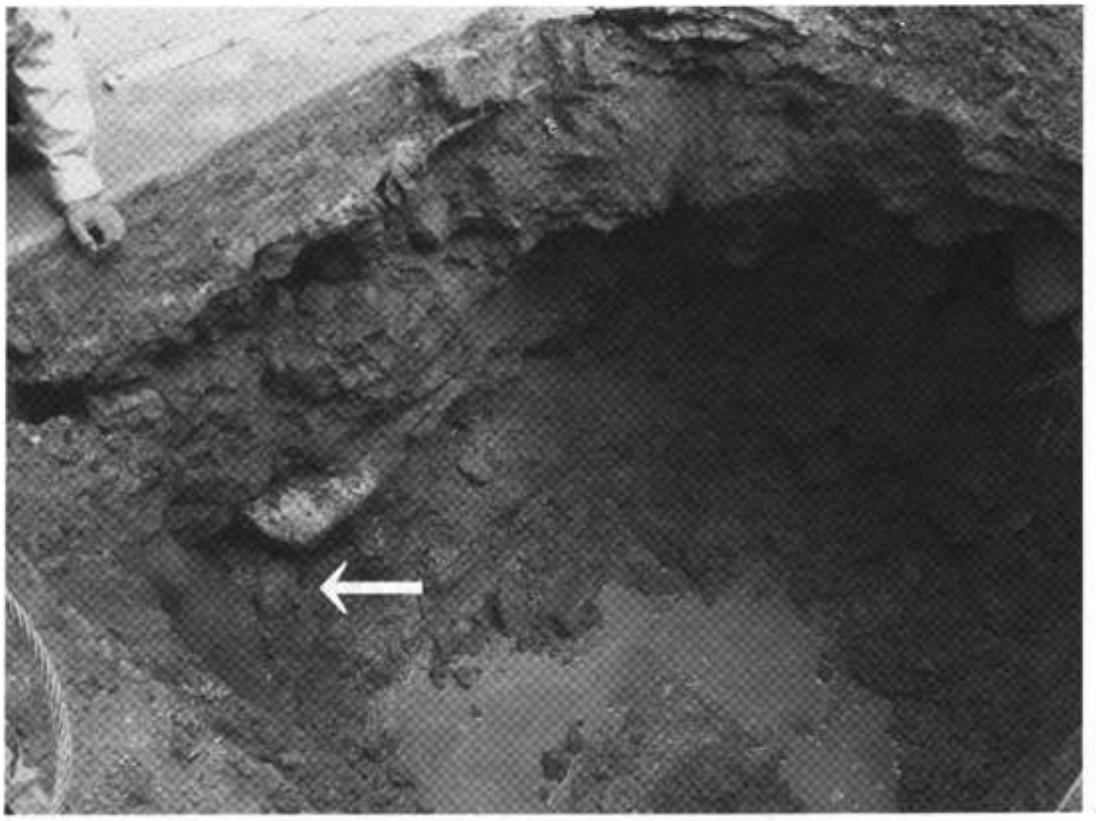
胴部は肩が強く張る形態を呈する。肩付近に凹線を2条施し、その間に板先状工具による連続刺突文を施す。上半と下半は別に成形した後に接合しており、内面にロクロナデ、外面は下半に回転ヘラケズリ、上半にロクロナデを施す。

台部は胴部と別に成形した後に接合し、内外面にロクロナデを施す。接合後にヘラ状工具を用いて長方形スカシを3方向に切り抜いており、胴部外面に切り抜きの際のヘラ状工具痕がみられる。

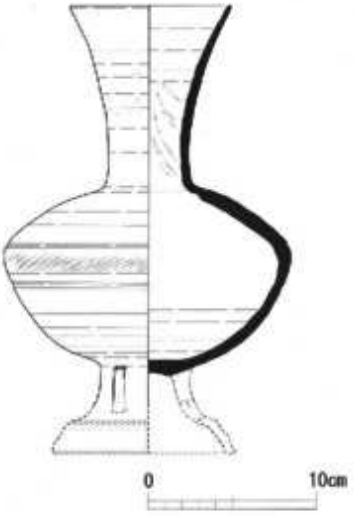
胎土は密で径2mm前後の長石・石英粒を多く含み、焼成は良好である。色調は内外面とも青灰色を呈する。

以上の特徴から、この遺物は6世紀末頃の所産と考えられる。また、台付長頸壺は古墳副葬品として特徴的にみられるものであること、および大石の存在から、当該民家の地下に横穴式石室が遺存していることが予想される。

(北口聡人)



第24図　須恵器出土状況（下水道建設課提供）



第25図　出土遺物実測図（S=1/4）および写真

図　　版

図版1　史跡 赤土山古墳（第9次）①

空中写真（昭和49年度撮影）　国土画像情報（オルソ化空中写真）国土交通省

赤土山古墳遠景（東から）

図版2　史跡　赤土山古墳（第9次）②

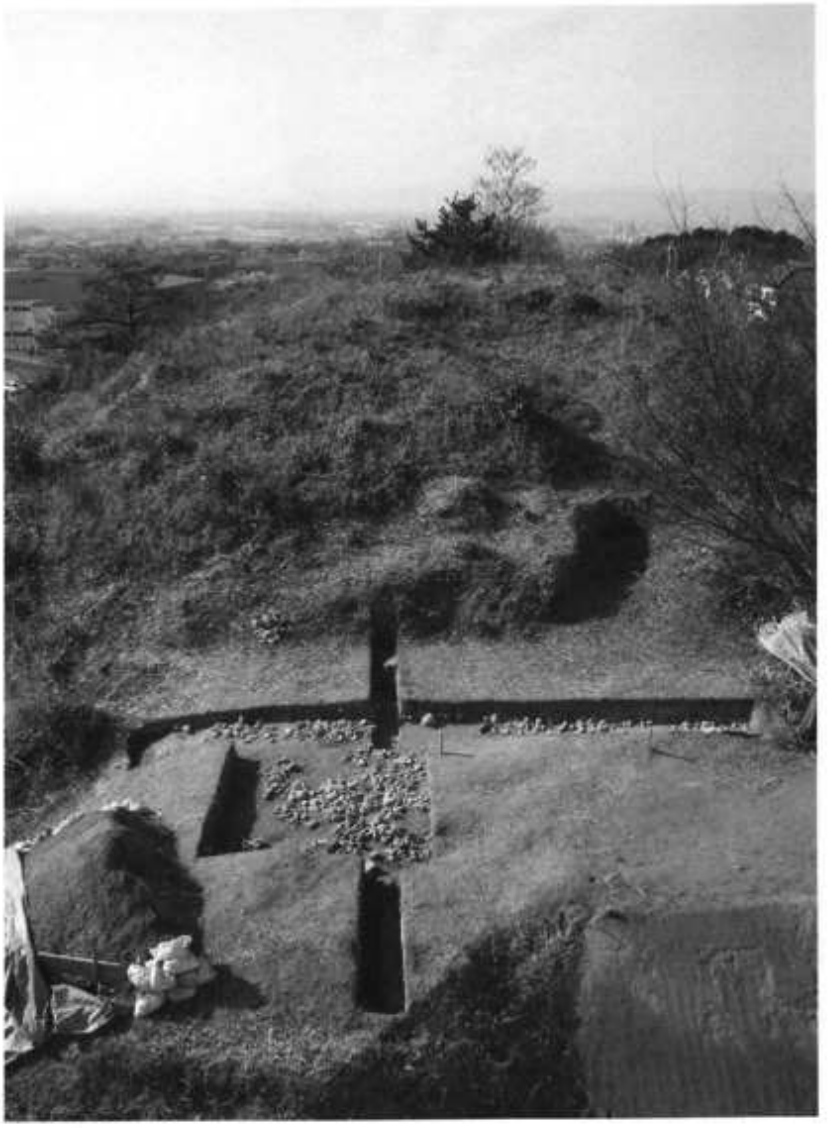
造り出し（北から）
昭和62年撮影

造り出し（南東から）
昭和62年撮影

造り出し（南東から）
平成19年撮影

図版3　史跡　赤土山古墳（第9次）③

調査区全景（南東から）



調査区全景（東から）

図版4　史跡　赤土山古墳（第9次）④

墳輪列L（L１～L３）

墳輪列L（L３～L４）

図版5　史跡　赤土山古墳（第9次）⑤

断面A-A'（北東から）

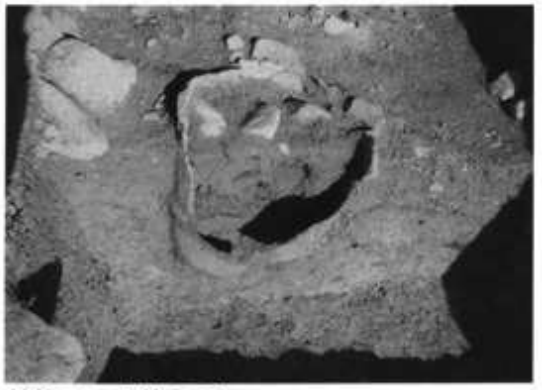
断面A-A'（北西から）

断面B-B' 北半（北西から）

断面B-B' 南半（北西から）

埴輪Ｌ２　検出状況

埴輪Ｌ２　断面


埴輪Ｌ２　埴輪内埋土

埴輪Ｌ３　検出状況

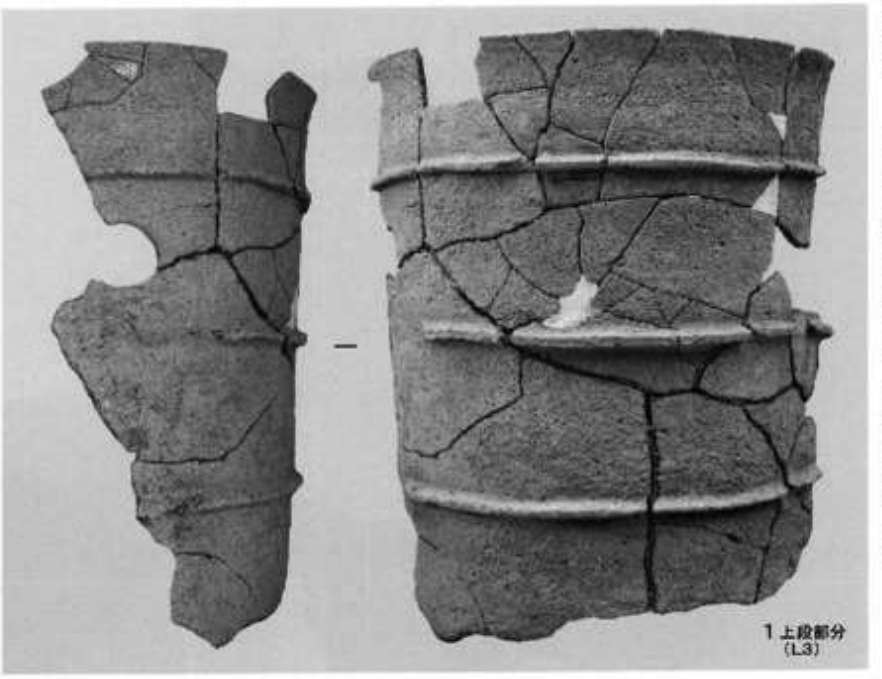
埴輪Ｌ３　上段部分出土状況（１）

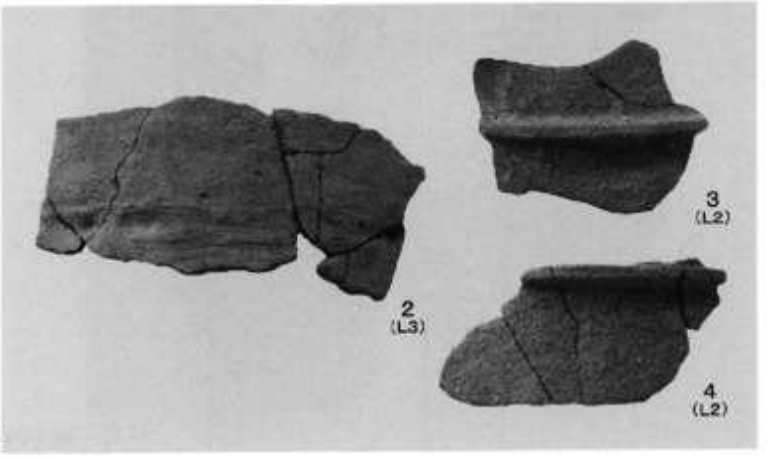
埴輪Ｌ３　上段部分出土状況（２）

埴輪Ｌ３　断面

埴輪Ｌ３　埴輪内埋土

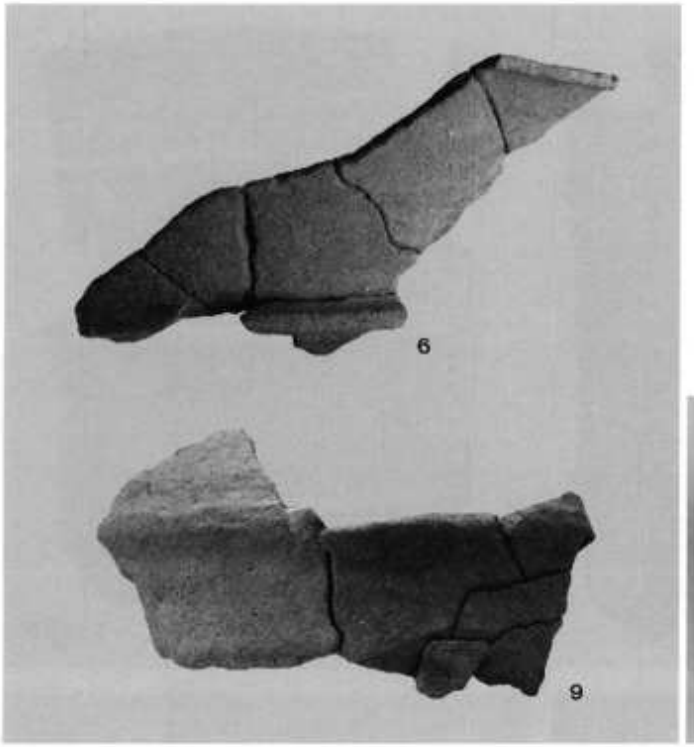
図版7　史跡 赤土山古墳（第9次）⑦

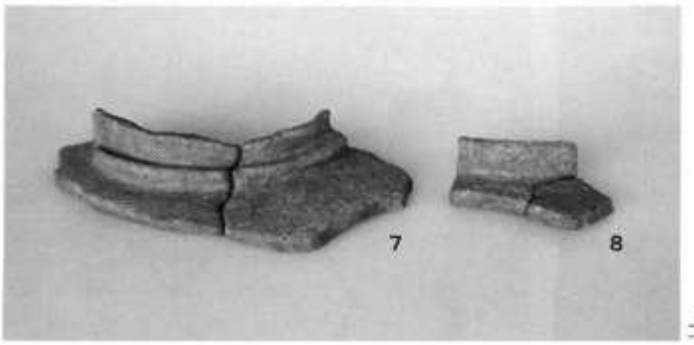




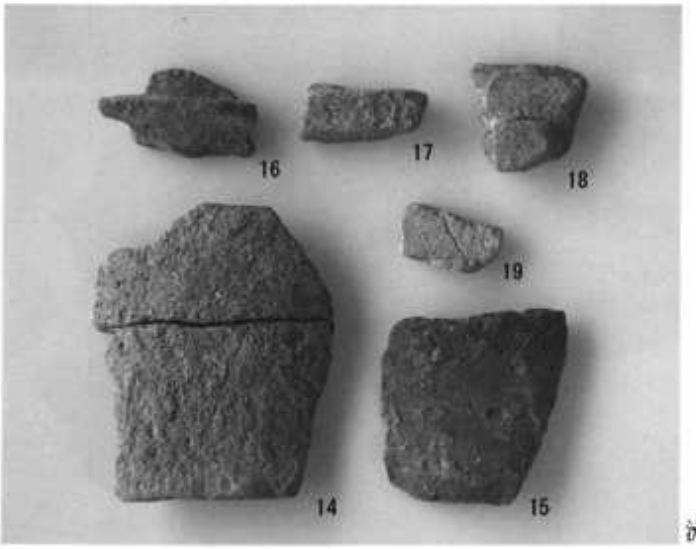
埴輪列L出土円筒埴輪

図版8　史跡 赤土山古墳（第9次）⑧





土坑内出土埴輪



流土内出土埴輪

図版9　成願寺遺跡（第15次）①

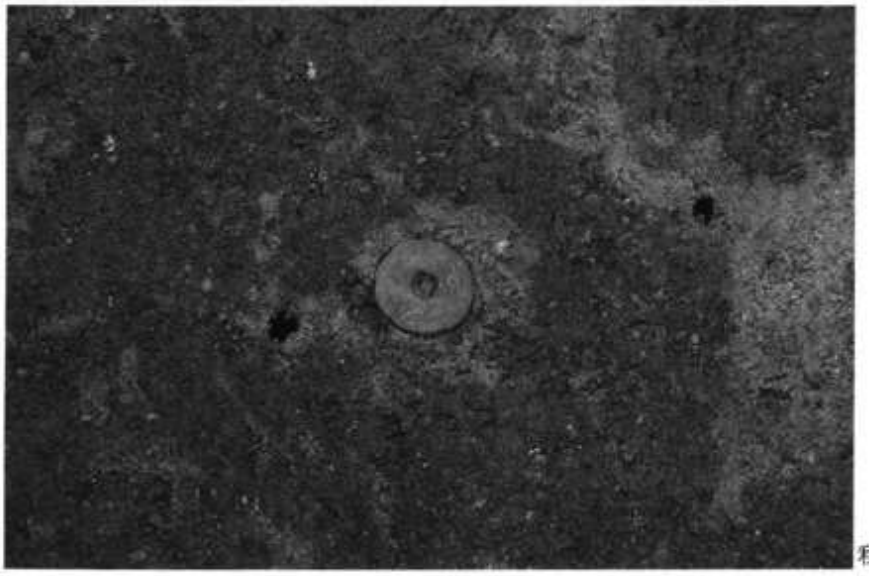
調査区全景（真上から）

調査区遠景（北から）

図版10　成願寺遺跡（第15次）②

調査区遠景（西から）

調査着手前（南から）



私鋳銭出土状況

図版11　成願寺遺跡（第15次）③

NR01掘削状況（拡張後・北から）

NR01掘削状況（拡張後・南から）

図版12　成願寺遺跡（第15次）④

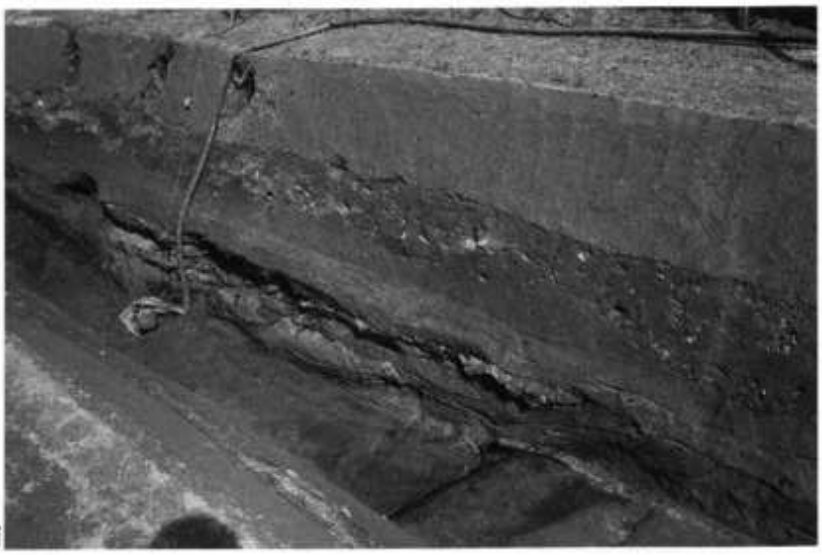
NR03須恵器出土状況

NR03掘削状況（東から）

NR03北側淀み完掘状況
（北西から）

図版13　成願寺遺跡（第15次）⑤

調査区東壁
北端部土層断面



調査区東壁
NR01南肩部土層断面

調査区東壁
NR03北側淀み部
土層断面

図版14　成願寺遺跡（第15次）⑥

調査区東壁
南端部土層断面

NR03出土土器

中世耕作面出土銭貨

報告書抄録

ふりがな	てんりしぶんかざいちょうさねんぽう　へいせいじゅうきゅうねんど
書名	天理市文化財調査年報　平成19年度
副書名	史跡 赤土山古墳（第９次）　成願寺遺跡（第15次）
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	石田大輔（編集）・北口聡人
編集機関	天理市教育委員会
所在地	〒632-8555　天理市川原城町605
発行年月日	平成21（2009）年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
史跡 赤土山古墳 第９次	天理市櫟本町 2920-1他	292044	8-D-25 ※1	34° 37′ 11″ ※2	135° 50′ 24″ ※2	20071219～ 20080118	21㎡	史跡整備事業
成願寺遺跡 第15次	天理市兵庫町 101-1、101-2、101-3	292044	11-B-266 ※1	34° 34′ 26″ ※2	135° 50′ 28″ ※2	20080303～ 20080324	107㎡	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 赤土山古墳 第９次	古墳	古墳	埴輪列	埴輪	造り出しの埴輪列を確認
成願寺遺跡 第15次	遺物散布地	縄文、古墳	河川	縄文土器・土師器・須恵器など	

※１　遺跡番号は奈良県遺跡地図収録の番号を掲載した。

※２　経緯度表示は世界測地系（平成14年４月１日より適用）による。

平成21（2009）年３月31日

天理市文化財調査年報　平成19年度

発行　天理市教育委員会
編集　天理市川原城町605番地

印刷　東洋印刷株式会社
桜井市三輪371